

捨てたい旅行



目次

田舎の星空	農民
コーラはじける	逢坂このみ
Trip Break 1	逢坂このみ
移り気	小楽
Trip Break 2	小宮理沙子
清く正しく	岡田朋之
土の中	きぬあさこ
Trip Break 3	藤谷りほ
秋風ゆれる	なかの空き地
Trip Break 4	岡田朋之
日々器晶とその畢生	七星黒乃

田舎の星空

農民

少しだけ、聞いてほしい。

少しで済むわけがないんだけども。

テーマは.....そうだな、百姓、でいいかな。

春、まず最初に稲作を行うために行うのはなんなのか知ってるかな？

勿論、いきなり田植えからじゃない。水を入れることも違う。最初に田を起こさなきゃいけない。冬の間固まってしまった土をほぐすんだ。

そんなことは知ってるから早くしろって？ まあまあ、そういわずに.....ものには順序ってものが.....。

とにかく、まずは田起こし。次に、水を入れると。それから起こした土を平らにするんだ。そうしてようやく田植えだね。

最近の技術だったら楽なもんだけど、これが江戸時代にはそうはいかなかった。ひたすら手作業なんだからね。田に足を突っ込んで腰を折り曲げ続ける。足を細かく動かせないから、その代わりに横着に体を動かしちゃってどんどん腰が痛くなる訳ですよ。

どうにかこうにか田植えを終えると、続いてはひたすら守る作業に入ります。まずは田に水をたくさん入れる。寒さから守り根を強く張らせ、雑草が増えないようにもできる。さらに水をあえて抜いて根を強くしたり。

後は肥料をまいたり、それでも生える雑草をとったりを繰り返しながら収穫を待つことになります。

そうして稲穂がつく季節、十分暑くなってくれることを祈って見守り、十分実ったところで稲刈りをするようになります。

ここも田植えの時と同じように、昔はひたすらに手間な作業でした。稲刈り、天日干し、脱穀まで人の手で運んで行わなければならないという信じられないような手間。それがコンバインを使ってしまうと脱穀までついでにやってくれるだなんていいもんです。

とまあここまでざっくりとお米ができるまでの解説をしたわけです、聞いてましたかね。正直内容はそんな重要じゃないんですけどね。大変だってわかってくれたらいいですよ。馬鹿みたいに手間ばっかりかかって、人手も必要で、それでも作らなきゃならなかった作物なのが米です。

理論的なところを言えばきりがなかったりします。雨が降らなきゃ作れないとか貯蔵しやすいとか.....。

で歴史的に言えば、年貢でしかなかったころから日常的に作られるようになるまで幅はあるけれども、一つ言えることがあるんです。ひたすらにコメ作りに専念してきた人たちが確かにいて、ひょっとしたら今もそうだし、これからも作り続けていくんじゃないかということです。

春。

田にはまだ前年に刈られた稲が残っている。雑草が寂しくまばらにしか生えていない。植物が乱雑に散らかっていて、およそ生命にあふれる瑞々しさはない。しかし畦道には対照的に力強く野草が生える。踏み込んで遊ぶことだってできる。走り回るには十分広大であるから子供の活気に包まれる。

そう思っていると田が掘り起こされている。日常の中に融けて主張していないので、本当に気付いたら強く濃く土の色が変わっているということになる。やがて水が張られて走り回れなくなり、田植えが済んで沢山の緑の点線が引かれる。普通は初夏になっているはず。

夏。

田植えの時期の苗は本当に小さくて細い。触る時には気を遣う。しかしその気遣いはなんだっただろうかと思われるほどに早く、すくすくと、成長する。気付けば片手で握れないほどに、気付けば近くで立つには頭の方が広がりすぎて邪魔になるほどに。

水辺の生き物がどんどんと切り替わっていく。初めのうちは小さなオタマジャクシだとかを眺められる。アイガモが必要になるような育て方をしているなら多くの虫も共に観察できるのだろう。オタマジャクシだって成長は早い。気付けば足が生え、気付けば手も生え、それを見たときには既にカエルの合唱の中。熱帯夜のような涼しいような気分になる。気分だけ。

秋。

力強く色濃い緑をひたすらに作り上げていた稲の様子は変わっている。稲穂をつけて、緑の田は黄金色にも染まる。そうした過程を経てきた稲はもう実りに実って倒れんばかりである。なんとなく心が躍るものだ。

蟬の種類がクマゼミからツクツクボウシに変わり、夕方なら外出しても苦にならなくなるころにはアカトンボが飛び始めるようになる。何か無性に寂しくなったりもする。目に刻もうと注意を向けるたびに、どこか稲刈りが済んだ所が増えていき、力強さの余韻ばかり胸に浮かんでくる。そうして、確かに主役を張っていた景色は終わる。変わる。

冬。

ここばかりは人によって思い浮かべる景色がまるで違うんじゃないかと思う。

季節がら外で走り回ろうとはまるで思わない。せいぜい異様な活力に振り回されて連れ出される程度。そうしていざ外に出ても、今までのように生命あふれる情景とはいかない。どうにもくすんだ灰色としか捉えられないような憎々しいまでの空の青さだけがある。

刈られた茎が地面に敷かれて、まだ希望はあったというのに、わずかな月日はそれをただの枯れた植物に変えてしまう。そして刈って残った茎から新しい稲が出てきて、気持ち青さは残る。先のない青さが。

ここまで、山脈を越えた先の話じゃないかと思う人もいるはずだ。さすがにあちらの側まで想像することはできないし、美化された雪景色しか見出すことはできない。

年に一度か二度だけ、強烈な寒気が流れてくることがある。それがきたときは皮膚ではっきりと痛いほどの寒さを感じ取れる。明らかに厚くて重い雲が頭上に来るのを知っている。その日の夜はどこか静かなことが多い。風の吹きすさぶ音がしない。しないことに気が付かないくらいに心地よく過ごすことができる。そして寝られる。

幼いころは期待だった。少しずつお約束としか感じられなくなった。最後には諦念と同情しか沸かなくなっている。ある意味では都市機能の停止こそ期待することだってある。

そんな朝、どこまでもだなんてスケールでなく、見渡せる大きさの白い絨毯があらわれる。そこは、遊び場だ。

どんどんと童心のままに行動することは減ってきた。それでもあそこは、自分の心に呼応して幾らでも楽しみ方を提供してくれる、最高の非日常であったように思う。

雪が敵でしかない生き方は、実感できない。

日常の中にだけでもこの繰り返しはどこか安心させられるものを感じていた。冷夏、とか酷暑、とか身をもつてのみならず視覚でも感じられて、普通の春夏秋冬がむしろ喜びでもって迎えられた。

私は農家にはならないので、思いを馳せることでしか彼らを体験できない。

でもきっと、美しい星空と変わらない日常こそが喜びだっていう生き方が確かに広がっているんだろうな。

日々の変化にはできる限り合わせようとするんだ。だけど合わせている限りは限界が来る。そして自然のままに育つものでもないから、どうにも限界を見つめながら変わらない日々の為に命を削らなきゃならない。

そこで生きる人々は革新を求めない。多くを負いすぎていて守るしかない。このままでもいいと思っている。ここで生き続けて、ここで朽ちていくように思っている。

そうして長い月日の中に自身を混ぜてしまうことが、彼らにとってはただ、苦痛でなく幸福だった。

カレンダーの予定欄に載せられるような未来と、予想したってしょうがないような無力で突発的な未来しかない。私はそこから飛び出した。飛び出せない人もいる。でも、飛び出そうとしない人たちの力で日々は回り続けているんだから、ずっと無変化を繰り返してく。

耐えられないのは程度問題で有って、私も、同じように芯からの変化なんて望まないっていう思考を核心とする。

だから、何時見ても素晴らしく思えるものを何度も見返しながら生きる。過ぎたものは振り返らないのではなく、踵を返して見つめて懐かしんで愛でる。

時の流れは悲しむものでも惜しむものでも焦るものでもなく、ただ受け入れるものでしかない。

「……とまあ、こんなところでしょう。御静聴、ありがとうございました、っと」
ひたすらどうしようもなく長い大演説、もっと言えば大・演説をぶちあげた。自信はない。しかしやりきったはずだ。
軽くどころか大いに満足だ。

しかしこいつのリアクションは……。もうちょっとなんかあるだろうが。待機か。待機なのか。
「で」
で、とは。

「それが、どういう、」
ちょっと待ってどこにその感情を隠してた。

「この夏休みにな、なんつにもせずにひったつすつらグダグダしていた、どういう言い訳になるってんだっ」
怠惰をなじられ続けて何とか反論できないかと捻り出したこの大作を、一つの要素も拾わずに怒気にまかせて切り捨てられた。旅行してきたと嘘をつくために家でこんがり日焼けした昔の風流人だって切り裂くにちがいない。

そういうことではない。
と言おうとしてさらに飛んでくる怒りにまみれたなじり。

過ぎた時間は戻ってこないからこれから云々。

そういうことではない。
懺悔である。

自身の罪に至る論理を、ひたすらにものに例えてみたに過ぎない。
生産性の無さは、変わらないこととは何も関連が無くて、もうほんとうになんかごめんなさい。
変化を望んで、歩き出して、疲れて、立ち止まっていたらそこから動けなくなって、それがどこか心地よくて。
なじりは聞く気はない。わかってる。

口だけの叱責だったのが鉄拳制裁に移り変わりそうだったのでモード変更。お話を聞かなきゃならない。こんなことでも、やっぱり楽しい。

コーラはじける

逢坂このみ



チク、チク、チク、チク...

規則的な音がすると思ったら、腕時計の秒針の音だった。遙か彼方の国へ来ても、秒針は迷うことなく日本時間を刻み続ける。日本時間で早朝の4時半ということは、こちらは夜の9時半だ。まだ空はうっすら紫がかって薄闇の中に濃淡を描きだしている。空は中途半端に昼と夜の間で彷徨って、顔をのぞかせた月が夜の世界へ誘っている。

ここ、パリは日暮れが日本よりも遅い。

太陽が昇って沈むまでの約10時間は、なんてあっという間なのだろう。その一日が365回あって、1年。そしてそれが、3回。それが高校を去ってから今に至る年数。大学生活の4分の3が終わりつつある。そんな、3年目の夏。高校生だったときと今と、時間の感覚が異なっている。高校生活の四分の三という、どのあたりだろう、大学受験に向けて少しずつ動きだした頃。急に時が加速して飛び去るように思われた頃。私は今こうして高校の自分と大学の自分を並べようとして、その比較そのものが無意味に終わることに気付く。何かが、決定的に違っているから。

今の自分の心を表すなら、このまさにどっちつかずの空の色。そして高校時代の私の心は、もっと晴れやかな青色をしていたはずだった。

毎年猛暑だと言うけれど、今年も日本はまれに見る酷暑を記録したという。しかし、去年の夏もそんな事を聞いた気がする。2年前の夏のことは、もう思い出せない。

猛暑のなか熱中症で死人がでた。川遊びをしていた男の子が激流にのまれて死亡した。そんなニュースが流れるなか、私はいつも不謹慎なことに、それが自分の姉でなかったことにほっとする。もう、3年ちかく会っていない姉の訃報ではないことに、安心するのだ。

3年って、結構長いようで、短い。正直な感想。

姉のいない春が三度終わり、だからといって何かが大きく変わったかという、そうでもない。私の人生が覆されることもなくて、なんとなく、時間に追われるようにして生きている。平地のような人生のなか、大きな困難に躓くこともなくここまで来てしまった。高校を卒業してから国立大学の経済学部にとりつき滑り込んだのを最後に、大きな山場は乗り越えてしまったような気分だ。

今は何に向かって進んでいるのだろうか。これまた、正直な感想。

そんな日常の中にぽんと投函された手紙、それがパリに住む姉、瑠璃からの三年ぶりの連絡だったのは、偶然と言うべきか、必然と言うべきか、とにもかくにも私は単身パリに来てしまった。

暮れゆく空の中で美しくライトアップされたエッフェル塔の輪郭をなぞっていると、
「エッフェル塔、なかなか綺麗でしょ」

ちょうど買い物を終えて戻ってきていた瑠璃が言う。無意識のうちに腕組みして、長い爪をいつもの癖で腕の内側に食い込ませていた。そこだけ肌の色が赤くなって跡がついている。

瑠璃の小さな耳もとで揺れている大ぶりのピアスが後ろのスーパーのライトを受けてきらきら光る。エッフェル塔の輝きと色合いが似ていて綺麗だなと思った。

「加奈子、もうちょっとちゃんとした服なかったの？」

思わず今日の自分の格好を眺める。上は毛玉だらけになったぼろぼろの真っ赤なセーターと、下はジーンズ。

「そういうの、面倒で。...今日ワイン、飲むの？」

買い物袋からのぞいたワインの先端を持って引っ張り出す。一体いくらするのだろうとすぐにお金の勘定をしてしまう自分がすこし悲しい。

「三年ぶりの再会だし、つきあってよ。たまには姉孝行しときな」

「じゃあお金、だそうか」

「いいよ。気にしないで」

瑠璃は私を置いて目の前の信号を足早に渡って行ってしまう。私の差し出したユーロ札は行き場をなくして戸惑っている。

瑠璃の背中はパリの夕闇に包まれていまにも溶けて見えなくなりそうだ。漆黒に染まっていく空は、今日という短い一日の終わりを告げている。

「お姉ちゃん、最近忙しかったんじゃないの」

「まあね」

追いつくと、二人でMetroと書かれた赤い看板の下の入り口に向かって階段を下る。

黒々とした階段を一段ずつ数えながら降りていくと、すごい形相で電話越しに怒鳴っている金髪の女性とすれ違う。それと同時に香水の香りも軽く鼻腔をくすぐってまもなく消えた。

「最近は立て続けに院の試験があったから」

「おつかれさま」

一度周囲の人を疑うようになると、すれ違う人がみな犯罪者のように見えてしまう。

前の瑠璃のやり方を見よう見まねで切符を改札口に通すと、ガタン、と重い音を立てて傷だらけの鉄の扉が前に開けた。扉が閉まる前に急いで通り抜けた。少し前で瑠璃がこちらを振り返って私の無事を確認した。

「...そんなおびえることないって。加奈子、ほんと変わってないなあ。そういえば母さんは元気？」

「そうだね、恋人を家に連れてきて私に自慢するぐらいには、元気」

「また？母さんも懲りないね」

瑠璃の言葉はホームに舞い込んできた地下鉄の轟音にかき消された。風にまじって、下水道のような膾えた匂いが鼻をつく。私は思わず顔をしかめた。

窓越しに見える乗客はみないかめしい顔をしていた。大柄な体格の彼らに気圧されながらきしきしと音をたてる車体に身体を預けた。履き慣れていない靴のせいでつま先が靴擦れしてひりひりする。

車内は狭苦しく、車体も古びていていまにも壊れてしまいそうだ。瑠璃に先刻指示された通り鞆を体の前に回してしっかりチャックを握っている。スリ対策だ。

周りの人々はみな無表情に地下鉄の揺れに身を任せていた。この人たちは一体どこからきて、どこへ帰るのだろうか。私のように外国からやってきたのだろうか、それともこのフランスという地で生まれ育ったのだろうか。様々な肌の色をした人たちが当たり前のように同じ車内で揺られている空間でそんなことを思いながら、隣の瑠璃に視線をもどす。

「お姉ちゃん、雰囲気かわったね」

横顔で笑って、瑠璃は口のなかで、そうかな、と短く呟いた。瑠璃が俯いて目をこすると、長く伸ばしたくせのない黒髪がその肩で揺れた。毛先はきちんと切りそろえられて行儀良くしている。ワインの袋を抱えた二の腕はこんがり焼けて健康的な色合いだ。母親がたまに連れてくる男の肌の色を思い出す。ゴルフ焼けをした健康的な体躯の彼は、最近よく家に遊びにくる。律儀にも、私への手土産を持って。

「お姉ちゃんに、お母さんから」

荷物でふくれた赤い旅行鞆の中から真っ白な封筒を取り出して渡した。宛名のところにも何も書かれていない、殺風景な封筒だ。

「ふうん」

受け取った瑠璃の横顔を盗み見た。瑠璃の目は虚ろに窓の外の暗闇をじっと見つめていた。肩のあたりにレースのあしらわれた赤いタンクトップにジーンズを合わせた姉の姿は美しいはずなのに、その無表情だけが浮いてなんだか奇妙だった。誰かによく似ていると思ったとき、しばらくのちにそれが昔の母親と同じだと気付く。

「それで、母さんの新しい恋人は？」

「スポーツジムで知りあった人だって。いつも私に何かしらもってきてくれるいい人ではある」

「それって単に加奈子にとっていい人ってことじゃないの」

「...かな。まあとにかくいつも通り楽しそうだよ、母さん」

「あーあ。いつまで恋愛ごっこしてるつもりなんだろうね、あの人もさ」

「恋愛ごっこ」という言葉がまさしくふさわしいと思って苦笑する。母親が家に恋人を連れてくるようになったのは私が中学にあがってまもなくのことだった。今でもはっきり覚えている。今日みたいに綺麗な夕暮れを見て、友達と一緒にきゃあきゃあはしゃぎながら自転車で坂を下って、カラオケでさんざん熱唱して、そうして家にたどり着いたとき、見知らぬ黒い大きな革靴が玄関で私を待ち伏せしていたから。それまでの浮かれた気持ちがどこかにすうっと蒸発して、急にみぞおちのあたりが冷たくなったのを覚えている。あのときから、私たちの家族は、ちょっとだけずれている。

瑠璃の住んでいるアパートマンは、メトロの駅から徒歩5分ぐらいの静かな界隈にあった。さっきまでいた観光客でにぎわう路地とはうって変わって人影がない。アパートマンの入口の重い扉の向こうには暗闇が広がっていた。ぱちん、と微かな音をたててほんのりとした蛍光灯の明かりの下に古びた螺旋階段が浮かび上がる。中はひんやりとしていて

、思わず身震いした。

カン、カン、カン、カン…。

瑠璃のヒールの先が高い音を立てて上に吸い込まれていく。音そのものが糸でひっぱられて上に軽々と引っ張り上げられるみたいだ。

先に階段を昇る彼女の踝は驚くほど細い。ふとした瞬間に、見知らぬ女の香りが鼻腔をくすぐった。ぐるぐる回っているうちに、何階まで登ったのか分からなくなってくる。

何階にたどり着いたのか分からないまま、突然ヒールの音がやんだ。乱れた息を整えながら待っていると、チャリンと鍵のこすれる音がしたと同時に真っ黒な扉が開く。中の暖気が肌にやわらかく触れた。

「入口、ちょっと狭いけど、入って」

暗がりのなかで靴を脱いだ瞬間、靴擦れの感覚が蘇り、痛みにつま先をよじらせながらフローリングの床を踏みしめる。

間接照明の下に浮かび上がった廊下を進むと大きなダイニングルームがある。

「お姉ちゃん、ここに一人で住んでるの」

綺麗に磨き上げられた床は、整理下手な瑠璃からは想像もつかない。

「ううん、二人でルームシェアしてるけど、今はその人旅行に行っていていないのよ」

部屋に満ちるしんとした静けさが肌をさす。カチカチと時を刻む壁時計に目をやった。もう夜の10時だ。パリに来てからというもの、時間の感覚がおかしい。日本を出てフランスに来たというのに、日本から連れてきた時計の針が私の意識に入り込んでくるみたいだ。

瑠璃は窓辺にある小テーブルにワインの瓶とペアカップを置いて、私に座るよう促した。窓辺に座ると9月にもかかわらず涼しい夜の空気が頬を撫でた。思った以上に、夜になると温度はぐんと下がるようだ。

「じゃ、何に乾杯にしようかな。3年ぶりの再会に、乾杯」

ワインを注ぐには不格好なペアカップがかちん、と重い音をたてた。一口含んだ赤ワインはどこか苦かった。

「...お姉ちゃん、毎日なにしてるの？」

「今はこっちの大学院に行くための勉強。試験が一段落ついたから、今は一休みだけだね」

私は、何も知らない。どうして、姉が日本の大学生活を捨ててフランスに留学する必要があったのかも、そこで姉と母親の間でどのようなやりとりがされたのかも。「お母さん、よく分からないから」というのが母親の口癖で、その後に「母さん分かんないから進路のことなら周りの人に聞きなさい」と続けるのがお決まりのパターンなのだ。だから、つまるところ、そういうことだ。母親は瑠璃の留学にほとんど関与していない。

「それで、楽しい？」

「何が？」

私は面食らって聞き返してしまう。

「何がって、大学よ。今3年めだっけ？」

「うーん」

思わず唸る。

「たのしいかと言われれば、楽しい。でもそれだけ。あまりにも空虚な毎日 zu うんざりする。退屈なんだよね、要は」

「あんたみたいな文系大学生ってほんとに暇人だもんねえ、勉強だってあんまりちゃんとしないうし、ほとんど遊んで4年が過ぎて、あれ、なんだったんだろうって」

かく言う瑠璃は日本の大学で文系の学部 zu 四年間通い、その後フランスの大学に入り直した。少なくとも、私の理解では。

「退屈でさ、なんかどこまでも自分が無になっていくみたいだよ。コーラみたいな。開けた瞬間は泡が弾けてぱちぱち騒いでるんだけど、一日も経てば気が抜けてただの甘ったるい液体になっちゃうみたいな、自分がそんな薄っぺらいものみたいに思える」

瑠璃は黙って聞いていたが、数秒ののちに言った。

「あんたって本当変なたとえばっかり」

でも、これは冗談でもなんでもなくて、コーラを飲むと、なんだか自分みたいだな、と思う。と同時に、コーラを飲んでそんなこと思ってる大学生ってどうなんだろうとも思うけれど。

コーラを注いですぐ、コップに耳を近づけてぱち、ぱち、と泡のはじける音を聞くのは嫌いじゃない。絶え間なくどこまでも自由で、私を安心させてくれる。

グラスに注がれたワインを耳に近づけてみるけれど、何の音もしない。スパークリングワインだったらよかったのに、とがっかりする。

「...まあ、言ってることは分からないわけじゃないけど」

「このワイン、ちょっと苦いね」

「お子さま。こういうのがおいしいってひともいるのよ」

「あっそう」

もう一口ワインをちびりとやった。わたしの舌にはどうも合わないらしい。

夜風が肌寒く感じられるようになったころ、瑠璃は窓を閉めながらこんなことを言った。

「あんたは考えたりしないの、将来どうなるんだろうってさ。自分の将来、知りたいと思わない？」

アパートマンの住人が帰ってきて螺旋階段がやかましくなる気配がする。

「そんなこと、考えたことないなあ。だってまだ大学生だし。将来がどうのっていうより、今が楽しければそれでいいよ、わたしは」

奇声に似た叫び声が階下から聞こえる。私ぐらいの年齢の集団だろうか。さっき地下鉄で怒鳴っていた女性といい、彼らは感情表現が私よりもオーバーなのかもしれない。

瑠璃は立ち上がって玄関に続く部屋のドアを静かに閉めた。再びかすかな風の音のなかに引き戻される。

「ふうん。そうなんだ。大学生なんて、そんなものよね。って私もまだ大学生なのか」

「...だって、今が人生の夏休みなんだから」

ドアの前で腕を組んでこちらを向いている瑠璃は、私がパリに来るまで想像していた姉の姿とは少し違っていた。もっと大人びていると思ったのに、瑠璃は、私の思う「大人」とは異なる道を選んでしまったようだった。

不意に浮かんだ寂しさを紛らわせるようにして、ワインを口に含む。やっぱり、苦い。

「私だって、一応この歳でも大学生なんだけどね」

瑠璃の目はどこか遠くを見つめていた。

「このところ、いつになったら結婚するんだろう、子供はいつ産んで、なんてこと、考えるようになった。こっちじゃ出産するのも大変そうだし、やっぱり日本で結婚して子供産みたいと思うわけ」

瑠璃の口から子どもという言葉がでてきたことにすこし驚いて

「お姉ちゃん、出産とか考えてるんだ。意外」

「まあ、もう20代後半だし」

そういつて笑った瑠璃の顔はすっかり私の手には届かないもののように映った。

「...こっちに来て、お母さんは、どういう気持ちで子育てしてたのかなって、思うことも増えたけど。だってうちのお母さん、もう私の歳で2児の母だったんだよ？信じられないよね」

「そう言われてみれば」

「お母さん、そりゃ恋人ごっこに走りたくもなるよ。子育て申なんてパートナーもいなくて、それで何かがぶちって切れちゃったんだろうな」

「...そう、なのかな」

ピーナッツを口に放り込むと、よくわからない味がした。

「自由に遊びたかっただろうしさ、友達とお酒も飲みにいきたかったんじゃない、20代前半の頃なんて」

私は分からないまま口をつぐんでいた。

おつまみのお皿が空になったので、新しいピーナッツが補充された。それを一つ口に放り込んでワインを流し込む。瑠璃の言葉を咀嚼するのに時間がかかった。

「わたしには、母さんのことは全く理解不能だから。...お姉ちゃんには、分かるんだね、少しでも母さんの気持ちが」
一瞬迷う素振りを見せてから、瑠璃はまあね、と答えてテーブルの向こうで足を組んだ。なんとなく、この話はもう終わりなのだと感じた。そんなポーズだった。

窓の外を眺めると、斜め向かいのアパートマンでカップルが戯れているのが見えた。

母親が母親をやめる宣言をして、「おんな」になると声高らかに言ったのは、あのカラオケから帰ってきた夜のこ

とだった。それが、我が家がずれだしたきっかけだった。

『わたし、お母さんやめる。それで「おんな」になるので、そのどこ、よろしく』

開いた口がふさがらないというのはまさにこのことで、制服姿で帰ってきたばかりの私は母親と並んだ見知らぬ男を見比べながら、言葉を失っていた。

母親の説明によれば、それまでの母親の人生には「自由」というものが欠けていたらしい。それで、その自由を追求めるためには「お母さん」というポジションが邪魔になる、というわけで、「お母さん」を辞退して、その日から生き生きと世界に羽ばたく「おんな」になることを決めた、らしい。

だいたいこんな説明だったように記憶している。

こんな抽象的な説明で当時中学生だった私は納得できるはずもなく、私は抗議した。意味がわからないし、そんなのはお母さんの勝手じゃないの、と。私の説得もろくに聞かず母親は「おんな」の顔で隣の男と仲睦まじく腕を絡めたりするのを見ていて、私は自分の無力を瞬時に悟った。

おまけに味方だと思っていた瑠璃まで、「べつにいいんじゃない、お母さんの好きにさせてあげれば」なんて冷めたことを言うのを聞いていよいよ私は自分に勝ち目がないことを認めざるを得なかった。

それからというもの、ご飯も何もかも私たちはばらばらで、自分の食べたいときに、適当な料理をつくって食べるよう、強いられた。家事も当然分担、ゴミ出しは当番制、皿洗いは気付いた人がやることになった。それでも我が家は案外効率的に回っていて、それ以前とはあまり変わらなかった。こげたハンバーグを食べても別に死ぬわけでもないし、たまに掃除を忘れたからと言って、生活に支障をきたすことはなかった。逆に大きく変わったことと言えば、母親がそれから定期的に連れてくる、いわゆるボーイフレンドの数々である。一人のボーイフレンドが長いときは2年ぐらい我が家に通うこともあったし、月単位で新たな顔がお目見えすることもあった。つまり、我が家には入れ替わり立ち替わり様々な男が出入りしていた。そして彼らは結構な確率で私たち娘に何か土産を残して帰るのであった。

「母さんが『おんな』になったのは今から六年ぐらい前のことだったね。なんだか、今でもあのときの母さんが理解できないよ。お姉ちゃんはあるときから、なんか妙に納得してたみたいけどさ」

「私だって、別に納得してたわけじゃないのよ。母親には母親の事情があるんだろうなと思っただけ。しかもそのとき私それどころじゃなかったんだよね、あの頃つき合ってた人と別れるか別れないかっていう話でもめてて」

「お姉ちゃんと母さん、なんだかんだで似てるよね、そういうとこ」

「そういうとこってどういうとこが？」

私は答えにつまppingワインが底に滞留しているカップをのぞきこんだ。

「...なんだろうね。常に恋人が絶えないところ、かな。二人とも奔放に生きてるように見える」

言葉を選びながら言うと、瑠璃は笑い飛ばした。

「うらやましいの？うらやましいんでしょう」

「お姉ちゃんのナルシスト」

瑠璃は一瞬真顔になって、

「うん、私ナルシストだけど。何を今更」

と開き直った。こういうところが、私には到底真似できないと思う。

「あんたも恋人つくったらちょっとは分かるって」

「私はいらない、そんなの」

「すねてる」

「...お姉ちゃん、ところで今恋人いるんでしょう」

「なんで分かったの」

「さあね」

チク、チク、チク...

秒針の音がうるさい腕時計を外してテーブルの上にコトリと置いた。もうすぐ日付が変わろうとしている。時差があるせいで今日は太陽を見たと思ったらすぐ夜になってしまった。ふとあの中途半端なパリの空の色を思い出していた。

「...そういえば」

静寂を先に破ったのは瑠璃の方だった。

「私の知り合いで、なんでも話を聞いてくれるっていう人がいるの。せっかくパリに来たんだしあんたも会ってみ

ない？」

瑠璃はフランスに来てなにかボタンを掛け違えてしまったのだろうかと深刻に心配してしまう。

「ねえ、お姉ちゃん、私、確かに中学時代は占いとか、好きだったけどね、だからと言ってそういうものに本気で傾倒しているわけじゃないの」

「占いじゃないから。一方的にこちらが話をして、それでお終い。料金は発生しない。だまされたと思って、どう？」

「...強引。お姉ちゃん、もしかしてこっちで宗教に染まっちゃったの？」

ため息まじりにつぶやいて苦いワインをすすった。どう考えても胡散臭すぎる。

窓の外はすっかり闇に包まれて、窓を見つめても化粧気のない自分の瞳がこちらを見つめかえてくるだけだ。瑠璃と一緒にいるはずなのに、たった一人でこの苦さをずっと味わってきたような錯覚に陥る。そしてその感覚は、ここに来てからだけではない、もっとずっと前から抱いていたもののような気がしていた。あの狭い我が家で3人仲良く住んでいたころから、ずっと。

小さい時からそうだった。いつも言葉巧みな姉にのせられては変な遊びにつきあわされた。ちなみにその中でも最悪だったのは、チューイングガムをそれぞれの家の表札につけて回るといふ、ある意味悪質きわまりない遊びだった。行為の意図もよくわからないし、おまけに当然のことながら見つかつては怒られるし、最悪としか言いようのない遊びだった。姉の奇抜な思いつきにつき合わされる、それは昔も今も変わっていないかもしれない。

そんな悠長なことを考えているうちに引き返すタイミングを失って、私は瑠璃とともに例の相手が住むアパルトマンに向かって突き進んでいた。

まだ路地は明るいが、腕時計は7時すぎを示していた。

石畳の道が歩きにくくもたついている私の一足先に瑠璃が立って迷う様子もなく入り組んだ小道をすすんでいく。高いアパルトマンの間を歩き回っていると、まるで自分がもう戻れない迷路の小道に入り込んでしまったみたいな気分になる。そして進めば進むほど、見える空の面積が小さくなっていくようだった。

「緊張することないのよ。私の知り合いだし、つきあいも長いから」

「ふうん...」

私の生返事が路地の隙間にとけて跡形もなく消える。

「お姉ちゃんは、何を聞いてもらったの、その人に」

「それは言わない約束なの」

「言わないって...どういうこと？」

ちょうどそのとき、瑠璃があるアパルトマンの入り口の前で足を止めてロックを外しにかかった。周りを見渡して気付いたが、パリのアパルトマンの入り口はどこもロックがかかっていて、暗号を入力しないと中に入れないようになっている。

数秒でロックが解けて、緑色に塗られた扉が音を立てる。

「先にどうぞ」

「私が先にいくの？」

「...もしかしてこわいの？」

私は顔をしかめて建物の中に足を踏み入れた。後ろで外につながる扉が閉まる気配がした。

チク、チク、チク、チク...。

腕時計が急にずっしりと重くなったように感じて、外して鞆の奥深くに直した。このままこの腕時計を身につけていたら、日本にいた時の自分がどこまでも追いかけてくる気がした。

瑠璃の住んでいるアパルトマンよりも古いのだろう、古い建物独特のぬれぞうきんの腐ったような匂いがうつすら漂う。パリに来て初日に乗った地下鉄の匂いと似ている。

らせん階段の最上階まで上る間に、だんだんと息切れしてくる。それでもなぜか、この階段が終わるところを目指して、足取りだけはしっかりしていた。

最上階に着いたとき、瑠璃が狭いスペースで扉の前まで移動して、ノックをする。よくわからないフランス語が一言二言交わされたのちに、扉は内側に開いた。バラの香料をたきしめたような、甘い香りが鼻をくすぐる。すぐ背後で鈍

い音とともにドアが閉まった。

ボンジュール、と私が唯一聞き取れる言葉を発して彼女はゆっくり、ほほえみかけた。妖艶な唇が感じの良い笑みを形作るさまに見とれて、つかの間言葉を失う。たっぷりした唇にひかれた赤いルージュが目には焼き付く。直視できるのはその唇ぐらいで、人形のようにうすいもやがかかったブラウンの瞳はとても1秒以上見ていられなかった。年齢は80歳代ぐらいだろうか。無数のしわが刻まれた顔の中で、唯一唇だけが色彩を放っていて、目だけが死んだように動かない。どこをとらえているのか分からない瞳は、ただ宙に向けられている。

「...お姉ちゃん、この人」

「私が訳してあげるから、なんでも言いなさい」

瑠璃は言葉をなくした私を置いて彼女と挨拶を交わし、フランス語で楽しげに話している。それに反応する老女の言葉はどれも短い。艶のある声だなという印象を抱いた。彼女の話し方がゆっくりのためか、フランス語の発音の美しさに聞き惚れてしまいそうになる。ぼうっとしている間に右手の爪はまた左腕の内側に傷をつけていた。組んでいた腕をとくと、鈍い痛みが腕の内側から主張してくる。

まるで赤ワインに浸したみたいな色のワンピースはモダンな家具たちの中でも目をひく。身を翻して廊下を歩く彼女の大きな背中をぼんやりと見送った。部屋のおしゃれな内装とそのシックな格好がアンバランスで、見ている者を居心地悪くさせる。

「もう気付いたとは思うけど、この方は目が不自由なの」

まるで独り言のような話し方で言う瑠璃の声がすぐ後ろでした。

どこか遠くで、雨が降り始める音が聞こえた。当然、外には出られないような予感がした。

「あなたは、言いたいことを言って。私の存在は無視してくれていいから、ただ今言いたいことを、言うだけでいいの。ただ、それだけ。私がそれを訳すけど、私はいていないようなもの。簡単なことでしょう、ちがう？」

雨の音が長いドラムのようなリズムで小刻みに耳に届く。もう、誰も話さなかった。

ふたりは、私が話しだすのを待っているだけだ。

私は、ゆっくりと口を開いた。

私、さいきんよく考えるんです。時間と私の人生について。

私、今年20歳を迎えるんですけど、この20年ってあっという間だったなと思うんです。世間では20年を節目に成人式が執り行われて、私は「おとな」の一員になります。

正直なところ、私は自分が「おとな」という部分に属しつつある実感は全くありません。それどころか、これからの一生、自分がどう生きればよいのかすら、分かりません。

私が生まれてから死ぬまで、私が何歳で亡くなるかはおいておくにしても、少なくとも今まで20年間生きてきて、下手したらあとこの4倍分の時間をかけて一生を終えることになります。そう考えると、人生ってあっという間なようにいて、長いですね。

こういうことを考えるようになったきっかけは二つありました。一つめは、うちで飼っていた猫がつい先日亡くなってしまって、その冷たくなった身体をさわりながら、ふと思ったことなんです。動物と人間の一生をなぞらえるなんて...って思われるかもしれませんが、ほかの動物のように短い一生でも構わないはずなのに、どうして私たち人間は一般的に彼らよりも長生きするのだろうと、不思議になりました。医学の進歩だとか、科学的根拠を挙げることはたやすいですが、私が知りたいのはそういうことではない。ただ、自分が長生きする意味を知りたいだけです。

その猫と過ごしたのは約3年になります。毛並みのいい、茶色の縞模様のおとなしい猫でした。そこそこ私も気に入ってかわいがっていたんです。その猫が、冷たくなってしまった姿を目にして当然胸は痛みましたが、それだけではありませんでした。猫の死に様は、どこか神々しかったのです。死ぬ間際などはもう弱り切って、直視できないぐらいだったのに、どうしてでしょう。そのとき、私ははたと思いました。猫の寿命は短いからこそ、いさぎよく死を迎えられるのではないかと。あくまで私の憶測ですが、そうだとしたら、猫も幸せだと考えたのです。しかし、そこでまた新たな疑問がわき上がりました。幸せとはなんだろうか、長生きすることなのだろうか、と。そう問いかけた時に、私はそれが果たして本当に幸せだと言えるのだろうかと思ってしまいました。

私たちが自分の人生を生き抜く方法はその人次第です。

私の周囲の人々は、自由に生きなさい、とよく言います。この世に生まれたからには、自由に生きたもの勝ちなのだと。でも、本当にそうなのでしょうか。

例えば自由に暮らして80歳を迎えたとき、自分に精神的に、あるいは肉体的に満足できるようなものがなにひとつ残っていないかもしれません。80年もの歳月を費やしたにもかかわらず、です。

私は、そんなのいやです。満足できません。

自由に生きることが正しいことだと、一体どうして言えるのでしょうか。

...一つめの話はこれぐらいにして、今度は二つめの出来事をお話します。それは、コーラを飲んでいるときに、思ったことです。私、自分がコーラみたいだなってよく思っているんです。こんなこと言うと頭がおかしいんじゃないかって思われるかもしれませんね...。どういうところが似ているのかというと、このつかの間に生きてきた私の人生そのものに、似ているんです、コーラが。20年生きてきましたけど、私の人生どの瞬間をきりとっても浅かった。この肉体以外で、20年かけて築いてきたと言い切れるものなんてありません。

コーラは小さいころから好きな飲みものでした。母親が外食に連れていってくれるときだけ飲めるご褒美みたいなもので、今でもなんだか特別なんですよね。でも、コーラはすぐにはじけてあっという間に気がぬけてただの甘い水になってしまう。それがとてつもなく悲しかったのを、幼心にも覚えています。最近では毎年、夏になると大きなコーラのボトルを買ってきて冷蔵庫に常備しているんですけど、開けたてのときは泡がばちばち騒いでいても、やっぱり翌日になると泡が姿を潜めてしまう。

それで、私の人生とコーラは、一瞬で散ってしまう儚さにおいて似ているなって、気付いたのが今年の夏のことです。突然、あっとひらめいたんです。深夜の真っ暗なりビングでひとり甘くなったコーラを飲んでいて。

コーラの中にとけこんだ大量の砂糖が、まるで私の体内全て、脳みそまでどろどろにして溶かしてしまうのではないか、と急におそろしくなって、私は思わずコーラを流しに捨ててしまいました。よく母親が言っていたんです、コーラばかり飲んでると骨がとけるわよ、と。

コーラを飲むと体に元気がみなぎってくるようで、私は大好きでした。それでも、その時、流しにコーラを全部流した瞬間、私は今まで見ないようにしていた現実直面させられたような気がして、どきりしました。

私には、恋人もいませんし、人に誇れるようなすばらしい経験だってほとんどありません。幼い頃は母親の与えてくれたものに甘えて生きてきました。今だってその延長線上にあるのかもしれませんが、それが、私につきつけられた、現実でした。

そのときから、時計の音が私をせき立てるように感じられる。時計の秒針の音が聞こえる度に、私の人生についてもっと一生懸命考えろ、と言われていたような気がするんです。

一度眠って目が覚めたらこの20年間の人生が全部夢だった、なんてことがあればいいのにとたまに思います。そして、これは全部が幻で、私はこの20年とは全く関係ない別の人生を歩むことができる。こんな風に毎日毎日時計の音にせき立てられるようにして生き急ぐこともない別の人生があるかもしれない。でも、どれだけ現実逃避したくても、時計の針だけはしっかりと耳に響いてくる。まるで私が生きていることの証を刻みつけるみたいに。

息をひきとるその日まで、このわたしという生から私は逃げられないのでしょう。

最後までお話聞いてくださってありがとうございます。20年後や40年後なんかにこの話を思い出して、笑えるといいんですけど。

話し終えたとき、私の腕の内側は爪が食い込みすぎて血がにじみ出ていた。リアルな痛みで眉をしかめる。脳みそに綿が詰まっているみたいに頭が重く、もうこれ以上何も考えられそうになかった。

「...それじゃ、帰りましょうか」

瑠璃が椅子をひいて立ち上がったとき初めて、私はそこに瑠璃がいたことに気付いた。今までずっと訳してくれていたはずなのに、その存在は意識の外だった。

「ありがとうございました」

私が軽く会釈すると、彼女は来たときと同じ微笑みを浮かべて、私の腕に手を伸ばしてきた。血がにじんでいるところにそっと彼女の指がふれて私は軽く混乱した。

気付けば、私は瑠璃と一緒に雨のやんだ夜道を歩いていた。もう日は暮れて久しい。にゃあ、という声に顔を上げるとアパルトマンの窓辺から一匹の黒猫が顔をだしてこちらを見ていた。目が光っている。我が家で亡くなったあの猫のことを思い出す。でも、さっきそれについて話したはずなのに、一体どういう内容のことを話したのか、うまく思い出せない。つい数分前まで自分が何を話していたのか、その記憶すらあいまいになって、来た道にぼろぼろ落としていくかのようだ。

隣で瑠璃が何か話しているが、それらも上滑りしてするすると流れていってしまう。

「...お姉ちゃん、ちょっと飲み物、買ってくる」

私は地下鉄のホームに設置された自販機の前にたってコインを入れた。迷わずコーラのボタンを押すと、直後にゴトンと鈍い音がして黒い液体の入ったボトルが落ちてきた。あけたてのコーラはいい音がする。思い切り口に含むと、口の内側の皮膚がやけどしそうにびりびりする。

きゅっと赤いキャップをしめると、いつものくせで左腕をかざしてから、腕時計を鞆に入れたことを思い出して、鞆をまさぐると、シルバーの腕時計が内ポケットから滑り出した。案外早い時間なのと思った。

コーラを手に持ったまま視線を感じて顔をあげると、こちらを振り返った瑠璃と目があった。瑠璃が口を開きかけたが、その瞬間地下鉄がホームに滑り込んできて、言葉が全く聞き取れない。

—なに？

—なんでもない。

—なんなのよ？

—だから、なんでもないって。

コーラをもう一口含んだ。細かな破裂音を立ててのどの奥に吸い込まれていく。まるで私みたいだと思った。コーラを片手に、地下鉄に乗る。

ぱちぱちという軽快な音が耳のすぐ裏で聞こえたような気がした。

私たちを乗せた地下鉄はゆっくりと動きだして、ホームから見えなくなった。

Trip Break 1



パリ、芸術の都とも言われるその街に対する私たちのイメージと現実は、意外にもずれている。石造りの美しい美術館、オペラ座、アパートマン。それらの建造物は堂々と威厳があり美しいのだが、街全体はどこか雑然としている。初めてパリを訪れた時、そのようなことを感じたものだ。

初めてパリを訪れた人の大半が驚くのが、その衛生環境の劣悪さではないだろうか。メトロ（地下鉄）の構内は独特の匂いがたちこめ、とても清潔で美しいとは言えない。日本の清潔な駅構内を知っている私は、日本とのあまりの落差に呆然としたものだ。

しかしその一方で、パリには私を惹きつけてやまない魅力がある。それは、数多くの本屋である。パリには多くの本屋があるが、日本のものとは違い、整然と本が並べられ、人々が静かに本を眺める空間になっている。日本の大型書店では、宣伝のポスターを貼るところもあれば、最近では書店員がお気に入りの作品に手書きのポップをつけているところもでてきた。しかし、パリの本屋は静かな佇まいの中、日々やって来る客に柔軟に対応する。例えば、自分の子供や赤ちゃん向けの本を求めにくる客に対するアドバイス。プレゼント用に本を探したいという客への提案。全て、書店員自らの裁量で行っていることだろうが、ここから醸し出される空気は、日本のものとはまた違って、なかなか面白いのだ。

本屋一つとっても、フランスと日本では全く違う。旅行と言うと美術館、歴史建造物、レストランなど、人によってその選び方も変わってくるだろう。ただ、旅行はガイドブックの中に書いてあることだけでは、終わらない。いちど、旅先で迷子になってみよう。ふらっと入った本屋、やふらっと入った雑貨屋が意外にも素敵な旅の思い出になるかもしれない。

文・写真／逢坂このみ



「淡路島に行こう」

「はあ？」

不意に、そう思い立った。夏休みももう終わる頃、どこかに旅行に行こうと思った。しかし、金がない私には飛行機や新幹線を使つての遠出は難しく、夏休みの終わりということで休みも残り少ない私には夜行バスや電車を使つての長旅は難しかった。

なら、車である。車を使えばいいのだ。と、多くの人は思うかもしれないが、私はペーパードライバーである。運転は遠慮したい。

というわけで、残る乗り物、それこそ誰もが知っているもの。

それを使つて淡路島に行こうと思ったのだ。

「自転車」である。

紹介が遅れたが、私の発案に「はあ？」と声をあげたのは、黒須。今回の旅に同行してくれる私の彼女だ。

確かに私は唐突にどこかに行こうと言うことは多々あったが、「淡路島」までの距離はここから約60km。平均時速20kmでも約3時間はかかる距離。

ちょっとそこまで、といった感覚で行ける距離ではないことくらいわかっていた。実際、私も黒須もそこまでスポーツマンというわけでもないので、予想した3時間以上の時間がかかるのは必至だろう。ましてや女の子にそんな無理を強いる私も私だ。しかし、黒須がいてくれなければこの旅行に意味は無い。

「頼む！ 頑張るから！」

「あなたが頑張ったところで、私がどうかなるわけでもないでしょう」

.....と、最初は文句を言われていたが、次第に、

「.....まあ、いいけど」

なんて軽く折れてくれた。これだから黒須は優しくて素敵なのだ。

そうと決まれば早速夜の間に、午後11時になるまで一通りの用意を済ませた。用意といっても軽い準備だ。

リュックサックにタオルと着替え、あとはもしもの時用に替えのチューブなど、メンテ用具を入れておいた。

乱雑な準備に、本当の自転車好きなら血相を変えて私を怒るかもしれない。もっと綿密な準備をしろ、だとか、そういったことを言うだろう。

けれど、私は黒須を信頼している。黒須がいる限り、きっとそんなことは起きないと信じている。何故なら黒須は私のパートナーなのだから。

黒須と明日の予定を話して別れ、予定通り午後11時には床についた。普段深夜3時を過ぎてから寝始めるような不健康児である私がこんなに早く寝るのは、明日の出発に備え体力を蓄えるため。

出発時刻は、朝の5時だ。



朝の5時出発、に特に意味はなかった。別にもう少し遅く出発しても今回の旅行に支障はない。では何故朝5時か、と言われれば、単純にまだ暑いから。夏休みの終わりとはいえ、この酷暑、いつまで続くのだろう。

まだ家族が誰も起きていない時間に黒須と落合い、自転車にまたがって出発した。

ジャリジャリと音を立てて漕いでいく。

.....ついこの間自転車屋に見てもらったというのにもう調子が悪い。一度分解するなりしたほうがいいかな。

「やったほうがいいと思うけど」

黒須がそう言う。

でも、元に戻す技量を持っていない。もともと不器用な質だから、もし分解なんてしてしまえば、元に戻せるどころかパーツをどこかにやってしまつて、二度と乗れなくなるかもしれない。

大切な自転車なのだ。自らの手で誤つて潰してしまうなんてことは絶対に避けたい。

とりあえず、出発前にだいたいのメンテナンスは済ませてきたから、今回の旅行だけはなんとかなるはずだ。

自転車のジャリジャリという音のことは忘れて、漕ぐ足に集中する。

まだ早朝5時台。普段ならぐっすり眠っている時間に、見慣れた道を走って行くのは心地が良い。形は一緒なのに、

静けさと、微妙な明るさと暗さのコントラストが、来たこともない世界を広げてくれる。

淡路島までのルートは、大学に向かうルートとほぼ同じだった。大学を越えてからは、ちょくちょくスマートフォンのナビゲート機能を使って方向を確認していくことにした。

出発前日にだいたいはパソコンのマップ機能で道を追ったが、60kmもの道のりを覚えてられるわけもなかった。「私になら、できるけど」

黒須が強がって言った。

「嘘言え。まだできないだろ」

まだまだ黒須は俺と同じで方向音痴だ。いずれは道を教えてくれるようになってくれたら、非常に助かるが。

.....いずれは。

大学を越えたあたりで午前6時に入ったところだった。

朝食を摂るか迷ったが、ちょうど体が自転車運動に調子を整えてきた頃だったから、もう少しあとまわしにすることにした。黒須も多分、同じ気持ちだと思う。

そこから先はあまり知らない道に入ったわけだが、特に面白いものがあるわけでもなかった。ひたすらに真っ直ぐ進み、行き止まりが現れれば立ち止まり、ナビ機能で道を調べて、再度出発。これを繰り返し、船着場に着くまでに10本以上のペットボトルジュースを消費してしまった。必死に喉を潤す私を、白い目で黒須が見ていた。

「飲み過ぎでしょ」

「仕方ないだろ、これだけ汗出りゃあ」

今までかいたことのないほどの量の汗が溢れており、黒のシャツがさらに黒くなっている。替えのシャツを2枚持ってきておいてよかった。

それほどまでに汗が溢れる。たかが60kmの道のり。しかし8時を越えたあたりからの日差しは予想以上に暑く、平均時速20kmという予測も大外れ。サイクルコンピューターは、無慈悲にも「平均時速15km」を表示し続けていた。

それでもなんとか漕ぎ続け、午前十時に差し掛かった時、「船着場」が見えた。

淡路島で思い浮かぶ、近畿と島をつなぐ「明石海峡大橋」は自転車での通行が禁止されている。計画の段階では、あの美しい橋を自転車で全力で漕ぐことを想像するだけで気持ちが高ぶったのだが、禁止されているというのなら仕方がない。

ということで船着場から出ているフェリーに乗船することになった。自転車と大人合わせて600円。案外安い。

乗船したあとは黒須と一緒に、離れていく船着場を眺め、見えなくなったら今度は近づいてくる淡路島を眺めた。船から見る限りでは、何もなさそうな島だ。リゾート地で有名な島だが、自転車で回る分には大丈夫なのだろうか。そんな不安を抱えながら、ついに、俺達は目的地、「淡路島」に到着した。



旅行地を「淡路島」に決めた理由は.....特にない。自転車で行ける距離で、なおかつ、あまり行ったことのないところ。それだけで十分だった。それなら和歌山や京都でもよかったかもしれないが、海を越えた先にある「島」だからこそ、普段住んでいる場所とは違った雰囲気を感じられると思ったから、という理由もある。

現在時刻午前10時。予想していたよりずいぶん遅い到着になってしまった。

ともかく、何もわからないまま淡路島に到着した俺と黒須だが、ひとまず適当に島周辺を巡ってみることにした。

船着場を出てすぐ右に曲がった先に、道の駅があり、そこで昼食を摂りながら、今後どうするかを黒須と話し合うことにした。

話し合いに移る前に一旦ここで、私の淡路島に来て初の食事となる食べ物の紹介をしておこう。

「淡路島バーガー」。淡路島は玉ねぎが特産品として有名である。その甘い玉ねぎは特製のソースと絡み合うことで更に甘みを増し、まるでフルーツを食べているような錯覚さえ覚えるほどだ。そして、玉ねぎだけでなく、挟まれる肉もまた、淡路島特製の淡路ビーフが使われている。神戸牛、近江牛、松阪牛とも並ぶと言われる肉がふんだんに使われ、それが先述の玉ねぎと絡み合うのだ。美味しくないはずがない。

さらに言えば「淡路島バーガー」、一種類だけじゃなく、淡路島各地にさまざまなバリエーションの淡路島バーガーがあるという。バーガー巡りの為だけに淡路島を一周するのも悪く無いだろう。

しかし、今回の目的はバーガー巡りではない。
……と、そんな淡路島バーガーを食べながら黒須と次の場所を話し合う。
「ガイドブックとか持ってないの？」
「まああるけど、どこも結構距離あるからな」
行きたい、と思った場所がどこも相当な距離がある。一つの場所と場所が連続してならんでおらず、一つの施設に行けば、次の施設は10キロ以上先、なんてのもザラのようだ。
「……全部回る気？」
「……まあ、無茶だろ、それは。誰も一周するって言ってないしな」
「なんだ、頑張るってその程度なの」
黒須に煽りを入れられたが無視することにした。だいたい、俺が無理に頑張って、黒須が壊れでもしたらどうするんだ。
「ひとまずはここだな」
指差した先に書いてあったのは「淡路・夢舞台」。
現在地から7kmほど進んだ先にあるところだが、他の施設と比べ規模が大きく、その「夢舞台」という名前が気に入った。さっそく私はその夢舞台へ向けて自転車を漕ぎだした。
時期が時期だからなのか、淡路島の道路にはほとんど車が走っていない。おかげで普段の走行とは違った開放感の中、緊張なんてほとんど感じないで漕ぐことができた。道路の状態も舗装されており、妙な段差はほとんどない。パンクも恐れず、ただひたすら、気の向くままに漕ぎ続けた。黒須も私同様心地よさそうにスピードを上げている。
次第に見える光景が変わってきた。トンネルを抜けた先では、照りつける太陽と、左手側には海が広がり、道の両幅には椰子の木が並び始め、まるで南国にきているような気分になった。
自宅とこの島まで、大した距離はなくても、これほどまで景色の違いがあるとは。
左手に見える海からの潮風を受けて、ダラけていた気持ちが切り替わりやる気に満ち溢れる。
「さて、まだまだあるんだろ」
「うん、まだまだあるね」
時折、黒須と会話を交わして、さらにやる気と速度を上げていった。夢舞台に向かうまでの道は坂道が一切無く、漕いでいるだけで楽しかった。
黒いコンクリートの平坦な道が、スピードを常に20kmに保ってくれる。
夢舞台が見えてくるまで、そう時間はかからなかった。



「淡路夢舞台」。
2000年に開業したこのリゾート地は、正面に巨大なホテルを備え、その奥には様々な施設が並んでいる。季節に合わせた花が咲き誇る「百段苑」なる花壇。今は「夏」ということで、世界各地の「ひまわり」が集められ、一斉に目の前に階段状に咲き誇っている光景は絶景であった。
そこから奥に行けば、室内植物園に出る。こちらは四季関係なく、世界中の珍しい植物を集めた施設で、食虫植物を集めた広場や珍しい果物が生える植物を集めた広場なんてものもある。たまたま今日は運良く、その珍しい果物を食べることまでできたりと、植物園なんて退屈なものだと思っていたが、思っていた以上に楽しむことが出来た。
さて、最後に夢舞台最大の魅力を持つ場をご紹介します。
それは、なんといっても「夢舞台」そのものである。
……こう書くと、「ここで経験したことが全てあなたの為になるのです」なんて宗教臭いことに聞こえてしまうが、そうではない。夢舞台というこの施設の「構造」が、最も素晴らしい体を成しているのだ。
先ほどの庭園から植物園までの道までに、高く、真っ白な壁が真っ直ぐに続いている。差し込む日差しが神秘的な雰囲気醸し出していた。そこを抜けた先には上へと大きく螺旋を描く道が伸びており、フロアの中央からは噴水が溢れている。螺旋階段を登り切って、あふれる噴水を真上から覗くことができた。
一番奥には神殿のような場所さえあり、「夢舞台」はまさに子供の頃に「夢」見た、まるでマンガやゲームの「舞台」が現実に現れたような場所なのだ。

しかも、そこに入るのはなんと無料である。

「夢舞台」から出た頃、まさに私は「夢心地」であった。



夢の世界を楽しんだあともまだまだ私は黒須と一緒に淡路島を巡っていた。

果てのなさそうな程の長く険しく急な坂道を登り切った先にある温泉で疲れを癒やし、わざわざ坂を登らないといけないのかと思うような場所にある「おみやげ屋」。一体誰がなんの目的で建造したのかわからない、全長100メートルという某巨大ロボットの大きさを彷彿とさせる「世界平和大観音像」……などなど、「自転車」でさほど疲れを感じない距離でも、十分に見応えのある、奇妙で面白いものを淡路島で見ることが出来た。

実に、来てよかったと思う。

「次はどこ行くの？」

「そうだな……」

……これでもう、後悔はない。

多くの場所を巡っても、まだ午後4時。今から帰れば行きと同じ速度で帰れたとして夜9時には家に着くだろう。往復約120kmという長さになるが、思っていたよりそんなに辛くはない……と思っていたが、どうにも体の動きが変になってきたので、大事をとって一泊して帰ることにした。

予約もしていないので、スマートフォンで検索をかけても安いところであれば30km先、近くであればほとんどが予約でいっぱい、田舎ながらも流石はリゾート地であることを改めて思い知らされた。

とはいえ、泊まろうと思えばそこら中に泊まる場所はある。問題は「価格」。

淡路島の多くの旅館や民宿では「ラドン温泉」なる浴場を設けているところが多い。大々的に宣伝しているところは軒並み一泊6000円以上。男一人の旅行には少々高く感じられる価格。

仕方がなく、風呂の良さは諦め、最も安そうな見た目の民宿に泊まることに決めた。それでも一泊4500円。部屋には布団が一枚と、テレビがあるだけ。とはいえ、今まで自転車を漕いでばかりだったから、横になって眠れるだけでも生き返る心地だった。

適当に近所のコンビニで必要な物を揃えて、明日の帰宅に向けての用意を整えたあと、泥のように眠った。

泥のように眠る前、少しだけ明日のことを考えた。

今回の旅行の「目的」。

しかし、せめて最後の今日くらい、それを忘れたかった。



目覚めた頃にはとうに朝日が登り切っていた。眠ったのは午後9時からだから、約12時間以上寝ていたことになる。

片道60kmと、淡路島旅行中の距離を合わせて相当の疲れが溜まっていたのかもしれない。

とはいえこれだけ寝たのだから、体力も気分も共に万全だった。

民宿の管理者に別れを告げて、自転車にまたがり、船着場へ向かった。帰宅の時間。それと、同時に、さあ、そろそろ決断の時だ。

船着場に到着して私は黒須に向かいあった。

そして、本来昨日言うつもりだった言葉を、ようやく私は彼女に告げた。

「さよならだ、黒須」

「え……？」

「俺はお前を捨てる」



一言で言ってしまうえば、今回の旅行において、いや、今回の旅行だけに限らず、私の人生において、「彼女」は存在していない。

黒須、なんて「女の子」はいないのだ。

いるのは、ただの「黒のクロスバイク」だけだ。

今回の旅行の目的、それは、私が彼女、黒須を捨てることにあった。

何故「彼女」と呼ぶほどに大切な自転車を捨てようとするのか疑問に思う人もいるだろう。それは至極当然のことだ。今でも私は彼女と出来ることなら離れたくないと思う。

実際、彼女は今まで私に尽くしてくれた。大学に入ってすぐに出会い、私は彼女と共にいたのだ。

黒須。苗字だけしか決められない私のネーミングセンスだったが、私は彼女を心から大切に思っていた。今まで電車で行っていた場所も、車でなきゃ面倒だと言われた場所も、彼女となら苦にならなかったし、彼女と旅することが何よりも楽しかった。

でも、今、俺の心には「浮気心」が芽生え始めている。彼女にメンテナンスと修理を繰り返す頻度が増していることに嫌気が差してきている。

彼女とどれだけ走っただろう。3000kmはゆうに超えているだろう。それだけ走れば、彼女だって衰えても仕方がないのかもしれない。

けれど、私は彼女が好きだ。愛していると言ってもいいだろう。それに、誰だってこれまで一緒にいてくれた相棒を、無下に出来る方がおかしいというものだ。

実際、乗り始めの頃は最後までこの黒のクロスバイクと共にどこまでも走ろうと思ったものだ。

それが、今ではどうか。

道具と人間。老いるはずのない道具が、人間よりも先に衰えてしまっている。衰えたものを捨てるのは、道具も人間も同じことだ。

しかし、そこに「愛」はない。

「愛」なくしては、大切に扱うこともできない。

それは大切にする側にとっても、大切にされる側にとっても煩わしいことでしかない。

だから、大切にすることに疑問を持つくらいなら私は彼女と別れようと、彼女を捨てようと思った。

そして、何よりも捨てようと思ったきっかけが、私の心に生まれた「浮気心」。要するに、「買い換え」だ。

かねてから欲しかった「ロードバイク」に、資金が貯まった今、ようやく手が出せそうなのだ。

クロスバイクとはスピードが一段階上のロードバイク。新車で購入するわけだから、その性能はきっと、今、衰えた黒須とは比べ物にならないだろう。

もし私がそんな「ロードバイク」を手にしてしまったら、黒須はどうなるのか。私は黒須をどうするのだろう。

「今まで大切にしていたからこれまでも」なんてのは建前に過ぎず、結局は性能の良いものに出逢えば、以前のものは簡単に捨ててしまう、そんな男だったのか、私は。

「お前は どうしたいんだ」

今までのように黒須に尋ねるも、彼女は答えない。答えるはずがないのだ。彼女の答えは、私の答えなのだから。

たかが物。たかが自転車だ。

.....それでも、今私がいるここ、「淡路島」は、私がこの場所に来ることができたのは、何よりもこの自転車、黒須のおかげだ。

性能が良い悪いの問題ではなく、ここに來た思い出は、黒須との思い出だ。それと一緒に、私は黒須を捨てる。

「最後の思い出」。それがこの旅行の目的だった。

「.....」

やはり、捨てたくない。

.....いいや、そんなことを思うために私はこの旅行を決めたのではないだろう。

私がこの旅行で捨てようと思ったのは、「黒須」だ。決して今のような、「黒須を捨てたいと思う気持ち」ではない。

この旅行でスピードが出ず、予定より到着が遅れたことも、坂道のクライミングがキツすぎて何度も諦めかけたことも、何度メンテナンスをしようと、やっぱり変な音が出てしまうことも、全部、普段の走行ではわからないことを。

普段、「黒須」と一緒にいるだけでは感じない、長く一緒に移動することで感じるであろう、「黒須」を煩わしく思う気持ち、「黒須を捨てようという気持ち」が芽生えることを願って、この旅行に来たはずだ。

でも、私にはできない。

スピードが出なくても、坂道がきつくても、メンテナンスを何度することになろうとも、私は「黒須」を捨てることはできない。

大切にしていたものを、そう簡単に捨てることなんてできない。たとえそれがどれだけ弱いものでも、どれだけ劣ってしまったものでも、過去に彼女と漕いだ3000kmの思い出と、今日、ここに来てしまった思い出が、私に彼女を捨てることを許さなかった。

「.....帰るか」

結局、私はしばらく黒須を見つめただけで、何をするともなく、また船着場へと向かった。

(捨てるなら今しかない)

心の何処かで、まだ、彼女を捨てることを望んでいる気持ちがあった。彼女を振り切らない限り、新しい世界は開けないと。彼女に固執しては、到底「ロードバイク」なんて手に入りはしないと。

でも、当然それでもいいのだ。彼女の心がそれを許してくれる日まで、私は彼女と共にどこまでも走ってみせよう。

彼女のパーツが途中で壊れて、私が道に投げ出され、大怪我を負ってしまうかもしれないとしても。「ロードバイク」なら三日で着くような場所に、わざわざ五日もかけて着くなんて時間の無駄を起こしてしまうとしても。

それでも、「大切にする」ということは、そういうことを受け入れることかもしれない。

結局、私はこの旅行で捨てることができたのは「黒須を捨てようという気持ち」だったわけだ。結局、何も変わらない。

到着したフェリーに、私と黒須は行きと同じように、乗り込んでいくのだった。

「また来たいな」

離れていく淡路島を見て、今度は南側も旅行してみたいと次の機会が訪れる未来を期待した。

「.....」

変わったことが一つだけあった。

それはもう黒須が二度と話さなくなったということ。

たとえ私が今回の旅行で再び、黒須をまた大切にしようと思い直したのだとしても、彼女はもう私を大切にはしてくれないだろう。

いつか、黒須は走行中に分解し、私を殺すかもしれない。

Trip Break 2



日本時間2012年9月3日の朝、私は父とワイキキビーチにいた。

朝だというのに周りには多くのアメリカ人がいた。日本では少なくともありえないことだ。休日であっても日本人は電車にすし詰めにされて出勤しているというのに、彼らの様子を見るに、おそらく働くということに関する感覚が根本的に日本人とは違うのだろう。日本のネットを見ていると外国人の大半が平日だろうが休日だろうが関係なくバカンスに興じているとある。下手したらずっと日本より財政が緊迫しているにも関わらず外国人はケ・セラ・セラの精神で平然と遊びに興じている。これを見るに、正直者ならぬ日本人は馬鹿を見ている。もっとも、私はどちらも羨ましくない。無難にしか言えないが、暗い表情で出勤する毎日も当然御免被る。しかし毎日バカンス尽くしも困る。どちらかに極端に偏ると、その有り難さがわかりにくくなる。浜辺を歩き、波打ち際で足を濡らしてただ歩く。サーフィンをしている人がいる。東側にはダイヤモンドヘッドが見える。場所によっては朝日が昇る時に山の先端と太陽が重なりダイヤモンドのように輝くことがあるそうだが、遠く離れたところから見ても美しい。

そういえば、今自分はワイキキビーチにいるのである。ここでいきなり、アニメギャグマンガ日和の二期の主題歌、『オアフ！ハワイ日和』が頭に流れてきた。歌詞を見ればわかるが、ワイキキビーチそのものが登場している。多分作詞者ですらきちんとワイキキビーチに来ていないだろう。そこでこの機会に、おそらくハワイに来た日本人で初めて、外国を題材にしたその歌を口ずさんだ。ここでモッチボールでも出来たらなお良かったが、ここに日本人は自分と父親だけだったし、何より人の顔が蠢くボールなんかどこにもない。生首を用意すればできないことはないが、その前に殺人罪で銃殺刑に処せられるだろう。

外国に行けば価値観が変わる！という人がいるが、いざ行ってみるとそんなに急に価値観は変わるものでもない。祖国の文化と比較したときに自分の国を客観的に見ることはできるが、突然に人間が豹変することはない。むしろ海外の観光地に来てまで日本のアニメの主題歌を歌って喜んでいる位なのだから、自国の国民性が根付いている限り、海外で自分を変えることなどできっこないのだ。



文・写真／小宮理沙子

清く正しく

岡田朋之



僕はこれまで、いわゆる外国というところに行ったことがなかった。

父さんは公立高校の教師で、母さんはパートをしている主婦。それほど裕福な家庭ではないし、父は多忙だった。

僕は中高六年間、必死に勉強をした。友達はほとんどできなかつたし、いじめの標的にもなったりした。部活にだって一度も入ったことはない。趣味はお金のかからない、図書館で借りた本を読むだけ。塾にも入らず、家庭教師もつけず、ただただ家で一人勉強した。

学校の帰り道、友人同士で喋りながら帰ったり、ゲームを持って、ファーストフード店に入っていく同級生を見て、羨ましく思わなかったわけじゃない。

でも、僕のために必死に働いてお金を稼いで、僕の学費を払ってくれている両親を思うと、せめて勉強しようと思った。

おかげで、高校受験は確実に公立高校に入るために、ランクを2つも落とした高校に入ったにも関わらず、東京の某有名私立大学に、学費免除の特待生として入ることができた。

自分みたいな人間でも、ここまでできたことを両親は非常に喜んでくれた。ささやかながらお祝いもしてくれた。

そうして、東北の片田舎から一人、東京へと移った。

東京での生活は決して楽しじゃなかった。

両親は月の仕送りは5万円が限度だといった。それでも、2人の稼ぎからしたら、かなり無理して捻出してくれた額だと思う。

ただ東京の暮らしはお金がかかった。アパートは、学校まで30分以上かかる場所だったが、格安の月4万円の場所を見つけた。ただ、それでも食費や水道代、ガス代、電気代、交通費のことを考えると、到底仕送りだけでは暮らしていけなかった。

僕はアルバイトを始めることにした。これまでの生活で、ろくに人とコミュニケーションを取らずに生きてきた僕は、大学でも友人はできなかつたし、お金の不安を考えるとサークルや部活にも入らなかつた。そもそも、自分のしたいこともわからなかつたのだ。かろうじて趣味なんて言えるのは本を読むくらいしかなく、それすらも好きで始めたわけじゃない。

アルバイトは色々悩んだけど、家庭教師に決めた。時給3000円で週四回、高校3年生の生徒に教えていた。

それから一年生の間、ずっと家庭教師を続け、受け持っていた生徒が無事受験に成功し、最後は謝礼まで頂いた。

同時に僕はバイト先を失ったわけだが、それでも問題ないほどの蓄えがあった。なんせ月20万近く稼いでいたのだ。税金でそれなりに引かれたが、それでも元々僕は、生まれてから一度も派手な生活をしたことがないし、友人はおらず、遊ぶこともなかった。相変わらず趣味は時々図書館で借りた本を読むことだったけれど、大学の授業についていくための勉強や、生徒に教えるための勉強がもはや趣味と化していたせいで、お金を使う機会がほとんどなかった。

いくら両親に渡そうとしたが、学生の間くらい遊びなさいと言われ、受け取ってもらえなかった。

しかし、遊び方なんて僕にはわからなかつた。これまでろくに遊んだことも無い上、遊び方を教えてくれる友達もいない。未成年だから当然といえば当然なのだけれど、お酒を飲んだこともなかった。

ある日、スーパーに行ってその日の食材を買い、帰ろうとした時だった。そのスーパーの出入口においてある、いくつかのチラシやパンフレットが目止まった。

そこには、僕がテレビや本でしか見たことのない、海外の綺麗な土地や建物が映し出されていた。

何気なくそのうちの一枚を見ると、僕は値段を見て思わず声を出してしまった。

それはグアムのパンフレットだった。そこには、3万円からグアムに行けると書いてあった。

僕はそのパンフレットを握り、急ぎ足で部屋へと帰った。

部屋に着くと、そのパンフレットをじっくりと眺めた。

流石に、学校の無いような時期はそんな安くは行けなかつたが、それでも僕の想像をはるかに超えた安さだった。ホテルと飛行機だけの、現地で特に何かが付くわけじゃないツアーだが、それでも十分だ。

考えてみれば、これまで自分の身近に海外旅行なんてものがあつたことがないので、かかる金額なんて気にしたこともしなかった。

パンフレットを見ている間に、僕はだんだんとグアムに行きたくなつた。僕にとっては、これまでにしたことのないような遊びだ。

けれど、僕はだからといっていきなり旅行に行くような勇氣はなかつた。

行き慣れている人からすれば、すぐにネットなり店なりで予約して、一週間後に行ってくる、なんてことができるのかもしれない。けれど、僕にとって旅行だけでもなかなかのことなのに、その上海外となればハードルが高かった。

なので、僕はまず、9月の中旬に旅行を予約した。早めの予約などでできるだけ安くし、思い切って一週間の旅行にした。

それから、僕はまた家庭教師のアルバイトを探した。時給はちょっと高めに3500円以上で希望を出す。旅行に行くなら、何かあった時のことを考えて貯金を増やしたかった。

そして夏休みも終わりかけの頃、ようやくグアムへと出発する日がきた。

パスポートも取り、ガイドブックにカメラに着替えを鞆につめた。それと、15万円分のドルを持った。

15万円なんて、普段の僕からしたら考えられないような金額だ。事実、空港に行き、ドルに変えてもらうため手渡す時も、少し手が震えていた。

そうして渡された大量のドル札と少しのセント硬貨は、最初こそ緊張したもの、日本のお金に比べてどうも作りがちゃちく、これまでほとんど見たこともなければ、当然使ったこともないお金のせい、なんだかお金だという感覚を、少し麻痺させた。

飛行機は窓側の席だった。僕は、年甲斐もなく興奮してしまった。

窓から見える景色は美しかった。真っ白な雲と青い空だけが広がっていて、この世界が二色だけになったみたいだった。飛行機で行くならばどこでも一緒だと分かっている、自分の中の南国へのイメージとその景色が酷く合っていて、僕は抑えきれず期待してしまった。

3時間少しほど飛行機に揺られて、グアムに着いた。

飛行機から降りた時、日本とは少し違う匂いがした。なんと言っているかわからないけれど、少しだけ甘かった。

英語は受験用のものばかりで、僕の英語がネイティブの人に通じるのか不安だったけれど、そんな心配は一切必要なかった。グアムの人はほとんど皆、日本語が喋れたのだ。

そんなに日本語が得意でない人も中にはいるけれど、向こうも日本人には慣れていて、聞き取りやすい英語を喋ってくれる。言語に関してはなんの心配もなかった。

そのまま、旅行会社の手配してくれているバスに乗って、ホテルにチェックインした。

ホテルにいと冷房が涼しく、慣れない旅行で疲れていたのか、いつの間にか寝てしまっていた。

起きるともう7時を過ぎていて、胸の辺りを締め付けられた。生まれて初めての海外旅行の、初日を僕は無駄にしまったのかという、なんとも言えない自責の念が、僕の中に居座った。

夕食は付いていないので、外で食べないといけない。僕は持ってきたお金のうち、30ドルだけを財布に入れ、他は全て金庫にしまった。

ホテルの部屋を出ると、またあの甘い匂いを感じた。もう日はくれていたけど、夜の暑さが日本とはどこか違って、改めて自分が違う国の、誰も知らない場所にいるのだと実感した。

適当に入ったレストランは、いかにもアメリカといった内装だった。お客さんは日本人と他の人たちが半々といったところだ。

メニューを開くと、そこには全て日本語でメニューが書いてあった。僕は、安直かもしれないけれど、初めてアメリカに来たのだからとハンバーガーを頼んだ。

まず最初に驚いたのは飲み物だ。一緒に頼んだオレンジジュースは、一人だということにピッチャーで出された。サービスだと言われたけれど、そう言われると飲み干さないと悪い気がして、必死に飲んだ。

次に出てきたハンバーガーは、僕の予想を全く裏切らない大きさと見た目で、大きなパンズの間には二枚のパティとベーコン、大きなトマトにレタス、チーズが二枚挟まっていた。とても上手にかぶりつける大きさじゃなく、ナイフとフォークを使うかと聞かれたが、僕はどうしてもかぶりついてみたかった。

周りの目は少し気になったけれど、その大きなハンバーガーを両手で持って、一気にかぶりつくと、口の周りがソースまみれになった。

僕の家が貧乏で、一人暮らしでも出来る限り節制していたため、牛肉をほとんど食べなかったからか、あるいは現地の空気に酔ってか、あるいはその両方か。全部食べきってしまった。

グアムに来てから4日目、早くも日中にすることがなくなり、ぼんやりとホテルのプールサイドで寝そべっていた。

2日目や3日目は、観光に行った。セントジョセフ教会はステンドグラスや中の装飾があまりに美しくて、キリスト教を一切信じていない僕でも、思わず一瞬息を止めてしまった。

また、ピティ湾の方にも行った。第二次世界大戦中に爆弾で出来たらしい、大きなボムホールという海底の穴の中、綺麗な珊瑚礁や熱帯魚を見てきた。

他にも、旧日本軍防空壕跡やスペイン広場、大聖堂バシリカなんかを見て回った。どれも日本には無いような、外国情緒を感じられる場所ばかりで楽しかった。

デデドの朝市にも行ってきた。なんだか観光地や綺麗な町並みとは違い、地元の人達が集まり、生活している場を見るのは楽しかった。屋台で売っていたバーベキューも甘く美味しかったし、また違ったグアムが見れた。

けれど、気がついてしまった。グアムは一人で来るべき場所じゃないんだ。

グアムは日本人が異常に多い。町中を歩いていたら、旅行に来ている人がそこらかしこにいるし、日本語がいつでも耳に入ってくる。

これだけ有名な土地なのだから、日本人がたくさんいるのもある意味当然だと思う。けれど、彼らの目的は僕とは違った。

ほとんどの日本人は、観光よりもショッピングと泳ぐことを目的に来ているらしい。

ここで皆がすることは、海で泳いで、ショッピングモールでお菓子や服、小物なんかを見て回り、疲れたら友達と喋りながら食事を楽しんだり、一緒に泳いではいしやいだり、バナナボートに乗ったり、プールでウォータースライダーや波の出るプールで泳いだりだ。

でも、僕は服やブランド物を買う趣味もないし、見る気もない。お菓子は買っても一人じゃあまり食べられないし、小物なんかも買ったりはしない。お土産だって、両親以外にあげる人はいない。

一人で泳ぐといっても何を楽しめばいいかわからないし、周りは恋人同士や何人かのグループで、楽しくはいしやいでいる中に、自分一人で遊ぶのは辛いものがあつた。

プールサイドにいても、周りから聞こえる日本人同士の会話が鬱陶しく感じられて、部屋に戻った。ホテルの部屋にずっといるのもつまらないので、特にすることも無かったけれど、町中を歩きに出た。

しばらくぼんやりと歩いていると、町中で客引きの人に話しかけられた。

グアムで日本人だけが歩いていると、すぐに客引きに合う。最初に話しかけられた時はびっくりし、戸惑ったけれど、わかりやすい日本語で説明してきて、何故か日本で流行っている芸人のネタまで把握しており、ものまねをして笑わせようとしてくる。変にしつこく誘ってくるわけでもなく、すぐに去っていく。

誘いはたいていが実弾射撃で、一応と言われてチラシだけは渡してくる。

僕は射撃なんて興味がなかった。なんだか野蛮だし、お金も50ドルくらいかかるらしい。

けれど今日は少し行ってみてもいい気分だった。

一人でグアムまで来て、最初の観光以外に楽しみがなかったなんてごめんだ。せっかく思い切って海外まで来たんだから、いつもならしないことをしてみようと、客引きの人に行きたいと伝えた。

ただ、僕は財布の中にあまりお金がなかった。なので、今は行けないと伝えたと、じゃあ車を呼ぶから、そのまま一回ホテルまで戻ってあげると言われた。

そこまでしてもらえるのならありがたいと、お願いしたら5分ほどで車が来た。ホテルの名前を告げて、前に着けてもらう。

部屋の金庫を開けると、念のため100ドル財布に入れた。元から入っていた分を考えると、150ドル、それだけあればどうにかなるだろう。

車に乗ると、すぐに射撃場に連れて行かれた。店内は少し怪しい雰囲気、心の底から怖くなったが、最初に日本語で説明を受け、日本語で書かれた契約書を手渡された。

契約書を端から端まで全部読み、何も怪しいことが無かったのでサインをする。コースはどれにする？ と聞かれ、壁に貼り付けているメニュー表を見た。

散々悩んで、50ドルの、2番目に高いコースにした。3種類の銃が撃てて、全部合わせて40発も弾がもらえるらしい。

お金を払うと、射撃用の部屋に通された。店員さんが、いくつかの銃を丁寧に持ってくる。最初は経口が小さな銃からだった。銃の撃ち方やフォーム、危険なことなんかを教えられる。耳を音から守るために、大きな耳あてみたいなものをつけて、ゴーグルをした。小さな銃は、大した衝撃もなく、弾はかなり真ん中の辺りに命中した。そのまま次は、少し大きな銃になったけれど、それもまだ余裕があった。

それで少し調子に乗って一番大きな銃を撃てみると、肩に恐ろしいほどの衝撃が来て、骨が折れたかと思った。的からも大きく外れ、銃口も真上を向いてた。

そのまま数発撃つが、なかなか的には当たらない。最後の一発でようやく、ギリギリ的の中に入った。お店の人が日本語で「お疲れ様」と言ってくれた。そのまま、射撃場の外の部屋に出た。

撃った瞬間の感覚がいつまでも自分の手に残っていた。身体中がムズムズするような快感が身体に残っていた。撃っていた時間はほんの一瞬のような気がして、また撃ちたいと思った。

いつのまにか時間は遅くなっていた。男とは言っても、海外で一人、遅い時間に帰るのは怖かったので、これまではできるだけ早い時間にホテルに戻るようになっていた。

店を出ようとする、お店で一番年を取ったおじいさんが「お兄ちゃん、これから用事ある？」と尋ねてきた。

特に無いと伝え、いいお店があるけどどうかと言われ、最初何のことかわからなかった。僕の反応を見ると、おじいさんは僕が悩んでいるとおもったのか「可愛い女の子たくさんいるよ」と、更にすすめるように口を開いた、

そこまで言われて、僕はようやく意味がわかった。

「いえ、結構です」

当然だけど、僕はこれまで女性とお付き合いをしたことなんてないし、キスはおろか、手を繋いだことだってなかった。2人っきりで話したことさえ無い。

そんな僕が、そんなお店に行けるわけはなかった。けれど、そのおじいさんはしつこく誘ってくる。

「そのお店、私、オーナーだから、安くしとくよ。2時間で飲み物一杯つけて35ドル。安いよ」

そう言って、どうやっても店から出させてもらえなかった。

僕は、もう諦めてその店に行くことにした。この店が大丈夫だったから、その店も大丈夫だろうという思いもあったし、女性に対する汚い心もあった。それでも、日本でなら、僕は絶対にしなかった。旅先だということで、どこか僕は緩んでいたんだろう。

さっき乗った車にまた乗せられて、その店に入った。射撃の店よりも薄汚いビルの2階にあった。

受付のためだけの部屋があり、そこですぐに35ドル払った。それ以上僕は持っていないですと言うと、大丈夫大丈夫としか答えなかった。

そこから部屋に入ると、中は薄暗く、聞いたことのない音楽がかかっていた。

そして、部屋の中心では、下着姿の黒人の女性が音楽に合わせて踊っていた。

僕は何が起こっているのかわからないまま、店員に言われるとおりに席に座った。

それからしばらくすると、僕の右隣に白人で金髪の女性が座った。

「コンバンワー」

これまでの人に比べて、随分と拙い日本語だった。彼女はいきなり僕の右手を握り、そのまま僕の太腿に持ってきた。微かに指を動かし続けていて、指先がほんの少し脚を撫でる。

「ワタシ、アーニャ、イイマス。ヨロシク」

アーニャは綺麗だった。日本人にはない独特の色気があった。少しだけぼつちやりとしていたが、年は若そうだった。

しばらくすると、店員が来て「オンナノコにお酒、一杯10ドル」と言われた。僕はそんなボッタクリを払いたくは無かったけれど、アーニャに一杯だけと言われて、仕方がなく頼み、10ドルを払った。

僕はどれにするかと店員が言ってメニューを差し出した。しかし、日本語は一つも書いていないし、暗い部屋の中なので読みにくく、アルコール以外にしてくれと頼んだ。

僕にはオレンジジュース、アーニャにはよくわからないお酒が運ばれて来て、乾杯をした。

アーニャは僕に、色々な質問をした。どこから来たのかとか、何歳かとか、いつまでこっちにいるのかとか。

中でも、アーニャは僕が大学生だということに大きく反応した。

「ワタシ、アタマヨクナイ、デモ、オカネイルカラ、ココハタライテル」

そう言って、大学まで行けるなんて凄い、賢いと、大げさ過ぎるほど褒めてくれた。

しばらくすると、踊っている黒人女性が僕の前に来て踊り始めた。なんだか見てはいけないものを見ている気がして目をそらすと、アーニャがアードル彼女に渡せと言う。なんのことかわからなかったけれど、とりあえずアードル渡した。

すると黒人女性は僕の両手を掴み、そのまま自分の下着の下にある胸を触らせた。僕は思わず硬直してしまった。そんなことは構わず、僕に触らせるだけ触らせると、黒人女性はまた別のお客さんの前へと行った。

「キモチヨカッタ？」

アーニャにそう聞かれて、僕は何も答えられなくなった。それを見てアーニャはくすくすと笑った。

それからしばらく、僕はずっとアーニャと喋っていた。とは言っても、僕がアーニャの質問に答えるか、アーニャの話の聞いているだけだけれど。

途中店員がやってきて、アーニャに酒をと言われたけれど、もうお金がないと言うと、しつこく僕にもう一杯買えと言われた。

僕が無理だと言っても相手は絶対退かず、どうしようかと思ったところ、アーニャが机の下で僕の膝を叩いた。何かと思って見ると、彼女はその手に１０ドル札を握っていた。

最初は戸惑ったけれど、アーニャが渡してくるので、その１０ドルでアーニャの酒を頼んだ。

「ガクセイサン、タノシイガ、イイヨ」

そう言って、彼女は自分のお金で頼んだ酒をゆっくりと飲んだ。

店員に時間だと告げられるまで、ずっとアーニャと喋っていた。

時間が終わると、アーニャはわざわざビルの外まで来てくれた。

「タノシカタ？」

と聞くので、とてもと答えた。

彼女はフツツと笑って、僕の方に一歩近づくと、そのまま口付けをした。

呆然としている僕に「オミヤゲ」と言って、アーニャはまたあの店へと戻っていった。

翌日、朝から外に出かける気にもならず、僕は部屋でごろごろ寝そべっていた。

あれからインターネットで調べてみると、ああいうお店は、女の子が客に頼んでもらったお酒で収入を得ているらしい。それなのに、彼女は自分で払っていたということは、むしろマイナスじゃないだろうか。

僕は生まれて初めて、女性にあんな優しくしてもらった。女性の肌に触れて、ずっと喋って、その上最後にキスまでしてくれた。

ああいうお店の子だけれど、それでも僕にだけあんなに優しくしてくれたのかと思うと、どうすればいいのかわからなかった。

結局、その夜も僕はあの店に行っていた。昨日よりも多くのお金を持って。

店員が僕の顔を見ると、ニヤリと笑って「昨日の子？」と聞いてきた。僕は頷いて、昨日と同じ席に座った。

アーニャはすぐに来た。僕が来たと知って、凄く嬉しそうにしてくれた。

また一杯目を頼めと言われて、僕はよくわからないままアルコールのところから一杯頼み、アーニャも昨日と同じお酒を頼んだ。

アーニャは、昨日と同じでよく喋ってくれた。僕もお酒が入っているおかげか、普段の自分を思い出せなくなるほどよく喋った。

今回は大量に持ってきたので、店員がアーニャに酒を買ってやれと言う度に、僕は全部買ってやった。アーニャは「アリガトウ！」と、彼女の胸を触らせてくれた。昨日触った黒人の胸よりもハリがあった。

またすぐ時間になり、僕は店の外に出た。昨日の何杯ものお金がかかったけれど、いい気分だった。アーニャはまた店の外まで出てきてくれた。

僕は、調子にのってお酒を飲み過ぎて、足元がふらふらしたが、アーニャが腕に抱きつきながら支えてくれた。

今日も楽しかったと伝えると、アーニャは嬉しいと答えてくれた。

「明日、昼間に会えないかな」

そう言うのと、ただでさえお酒のせいで鼓動の速かった心臓が、更に速くなるのがわかった。

アーニャは悩む素振りを少しした後「イイヨ」と答えて、一枚の紙を差し出し、手渡した。何かと思うと、電話番号とアドレスが書いた紙だった。

そして僕らは、DFSショッピングモールの前で待ち合わせをして、昨日と同じキスをした。

朝起きて、僕は体よくあしらわれただけじゃないかと、何度も不安になった。だが、もらった紙に書いてあるアドレスに、必死で考えた英語のメールを送ると、アルファベットで書かれた、簡単な日本語のメールが返ってきた。

決心して待ち合わせ場所に行くと、アーニャはすでにいた。

陽の下で見るアーニャは、あの夜の店の時に比べて幼く見えた。

アーニャは僕を見つけると、にこっと笑って、こっちに駆けてきた。

「マッタヨ」

アーニャは、白人女性なのに僕よりも背が低かった。ジーパンに半袖のシャツ一枚だけを着ていて、お店で着ているような服よりも全然似合っていた。

まずレストランに行き、二人で適当に食事を頼んだ。

彼女は、外でだともっとよく喋った。そうは言っても、日本語があまり上手じゃないし、僕の英語力も大したことはないの、そこまでたくさん喋れたわけではないけれど。

アーニャに年齢を聞くと、26だと言われた。思ったよりも年上だったことに驚いたけれど、あんな店で働いているのだから、仕方がないのかもしれない。

それでも、雰囲気や仕草は、日本で遊んでいるような女の子と同じように見えた。極々普通の、女の子。

店を出て軽くショッピングモールを見たいとアーニャが言ったので、いいよと答えると、アーニャは僕の手を握って歩き始めた。

僕が二人分の会計を済まし、まるで恋人同士のように歩き始めた。冷房が効いたショッピングモールの中でも、僕は首から上が熱かった。

アーニャは自分の物をみたり、あるいは僕に服を試着させ、似合うと褒めてくれた。

まるで本当に恋人になれたみたいで、あまりの嬉しさに少し目が潤んでしまった。

日本で、僕が女の子に優しくされたことなんて一度もなかった。勉強ばかりしている僕に話しかけてくれる人なんていなかった。

そのままずっと二人で中をうろうろしていると、アーニャがある店で欲しいネックレスを見つけた。

値段は300ドル、僕からしたらかなり高かった。

彼女が最初、綺麗だと言ってみていると、店員さんが着けてみられますかと言ったので、試しに付けてみた。

彼女はそれを何度も鏡で確認して、嬉しそうにしていた。

けど、ふと暗い表情になって、哀しそうにした。

僕は自分の財布の中身を思い出した。財布の中には400ドルほど入っていた。明日帰国なのだから、買えないことはない。

僕は、店員さんにこれをくださいと伝えた。聞いていたアーニャは驚いた顔をしていたけれど、何か言われる前に買ってしまった。

渡そうとすると、もらえないと言われたが、是非もらって欲しいと下手な英語で言うと、アーニャは受け取ってくれた。

僕は彼女に今晚は店に行けないと伝えた。昨日の散財とさっきのネックレスで、持ってきたお金はほとんどないのだ。

アーニャは悲しそうな顔をしてくれた。

そして、できれば僕に、パソコンのアドレスを覚えてくれないかと伝えた。日本に帰っても、君と連絡を取りたいと。

彼女は携帯で、パソコンのアドレスを送ってくれた。いつでもメールをちょうだい、絶対に返すからと言った。

結局、僕のホテルの前まで付いてきてくれたあと、キスをして別れた。一瞬部屋に誘おうかとも思ったけれど、そこまでは勇気が出せなかった。けれど、キスをした瞬間、確かに愛されている気がした。

夜は、よっぽど店に行こうかと思ったけれど、結局行くことなく、僕は人生最初の海外旅行を終えた。

僕は今、4度目となる海外旅行に行こうとしている。これまでと同じグアムだ。

アーニャとは、毎日のようにメールをした。僕は彼女に会いに行くために、必死にバイトをした。家庭教師の数を増やし、必死にお金を貯めた。アーニャは無理しないでねと、優しい言葉をかけてくれた。

そうして、あれから2度グアムに行った。当然、アーニャと会うためだ。

僕とアーニャは、一緒にグアムにいる間、ずっと二人で過ごした。ビーチで泳いだり、観光地に2人で行ったり、夜はアーニャの働くあの店へ行った。旅行の度に、いくらかのプレゼントを渡し、日本に帰っては、アルバイトをして次の旅行用のお金を貯めた。そのせいで大学の成績は酷いものだったけれど、そんなことはどうでも良かった。

彼女には、もうあんな店を辞めたらどうかと言ったが、お金が無いからと、辛そうな表情をされると、僕は何も言えなくなり、旅行の最後にいくらかのお金を渡した。毎回断るアーニャに、僕はその度無理矢理にお金を握らせた。

3度目のグアム旅行が終わってからしばらく経ったある日、アーニャのお母さんが倒れたとメールが入った。

入院して、お金が必要だ、どうしよう。英語と日本語が入り混じったメールで、アーニャがどれだけ焦っているのかわかった。

僕は彼女に、送金をした。彼女は最初断ったけれど、最後はありがとうと言った。

僕はまた、必死にお金を貯めた。彼女の元へ行くためのお金を送金したため、また一から稼ぎ直した。もう、授業にはほとんど出ていない。

この数カ月の間、必死に稼いだお金を全部持ち、アーニャのいるあの町へ行く。砂浜と海が広がる、あの美しい島へ。

彼女は、僕がプレゼントをしたら笑ってくれるだろうか。青空を見下ろしながら、ずっとそのことだけを考えていた。

土の中

きぬあさこ

今年の夏も、庭に真っ赤なトマトが育った。はちきれそうな皮の中に、酸味のあるどろっとした、あのほのかに黄色い中身をみっちり詰めている。土の中の栄養を少しずつ吸い上げて、ゆっくりと肥え太る様は見えていたまらなかった。その成長に気付くたび、頭の真ん中から痺れる様な衝撃が奔った。こんなに背徳的な快樂があるとは誰も教えてくれなかった。これからも、きっとそうなのだろう。みんな知らないのだ。世の中は何も知らない人だらけなのだ。

土の中の栄養とは何だろう。腐った果実。枯れた木々。あるいは昔ここで死んだ動物かもしれない。かつてここで流された誰かの血かもしれない。それともただの生ごみかもしれない。土は素知らぬ顔をしながら、ありとあらゆるものをその体に抱き抱えている。元が何なのか、誰も分からなくなるまでその形を溶かして、自分の中に飲み込んでから、自分に宿るものにそっと分け与えるのだ。

皆知らない。何も知らない。私だけが知っている。

※

私にはかつてとても愛した人がいた。

彼は弁護士だった。交通事故で私の親が死んだとき、ようやく成人したばかりの小娘だった私のために様々に奔走してくれた。

礼をしようとするとは彼は私の親に世話になったからその恩返しだ、だから何も気に病むことはないと言った。私は彼にとって恩人の子であった。さらに言うならば私はいくつかの事情により彼と共に暮らしていたこともあった。かつて私にとって頼れる大人であった彼は、更に頼もしい人間として私の前にいた。

彼の言葉にそれでもと言い募ると、じゃあ僕を愛してくれるかいと笑った。白く光るように明るい笑顔だった。少し間を置いて私が頷くと、もっと大きく笑った。

きっと冗談だと思ったのだろう。そうならなかったのはどうしてだろうと今になって苦しくなる。

彼のおかげで私の親の遺産はほとんど全てが何事もなく私のものになった。一人で暮らすにはかえって苦勞する広さのこの家も、彼のおかげで残っている。彼が私の親の遺産整理の最後の報告をしてくれたのもこの家だった。

これで、もうこうやって頻繁に会うことはないでしょうが、結婚でもしたら教えてくださいね。お祝いを送ります。報告が終わった時、彼はそう言った。あの時我慢でできていたら、と思う。知らぬふりをして、そのまま彼を見送ることが出来ていたら。けれど、私には一つの大きな決意があった。

愛しています。

私の一言で客間の畳の青臭い匂いが強くなった気がした。私は彼と卓を挟み向かい合って座っていた。目の前の彼は俯いていて、私からは表情を隠しているように見えた。あの時彼は帰り支度の最中だったから、それは私の考えすぎである。知ってはいたが、偶然というよりは故意を感じたのだ。

小さな声だったと思う。大事なことを言う時には、大きな声は出せない。だからその言葉が本当に彼に届いたかどうかは分からない。けれど、彼は帰り支度をする手を止めた。

私はもう一度その言葉を言うため、立ち上がって卓の向こうにいる彼の傍へと歩いた。正座をしていたせいで一歩ごとにくすぐったいようなしびれがつま先から全身へ広がった。視界が白く弾けるようにくらんだのは、立ちくらみのせいだったろうか。

私、あなたを愛してるんです。

立ったまま私は言った。私を見上げる彼は呆けたように口を開けていた。

本当ですか、本当にそれを信じていいんですか。

そう尋ねた彼に私は以前の様に黙って頷いた。彼は笑わなかった。

季節は今と同じ夏だった。少し赤くなった光が戸の隙間から覗いていた。私は彼でも汗をかくのだと知った。

私たちはその日以降もこの家で頻繁に逢瀬を重ねることになった。

※

彼とそういう関係になってから数か月した頃に別れを切り出されたことがある。

日く、結婚をしなくてはならなくなったからという理由だった。弁護士としての彼が所属している事務所の所長の娘との縁談が決まってしまった。このままいけば事務所を引き継ぐか、独立までの世話を引き受けてもらうことが出来る。断ればどうなるか分からない。君とのことは本当に申し訳ないと思っている。許されることではない。でも、どうか別れてほしい。僕に出来ることなら何でもするから、どうか。

私から詰られること、罵られること、痛めつけられること、脅されること、すべてを覚悟して彼はそう言った。それらのことが何よりも苦手なはずの彼にしてはとても大きな覚悟だったはずだ。不安のせいだろう、彼の顔は青白く手は震え、雨に打たれたように全身が汗で濡れていた。

私は彼が覚悟していたことを全て行わなかった。詰っても罵っても痛めつけても脅しても意味はなかった。それらのこと以上に私には望むことがあったのだ。

別に、構いません。

そう言った時彼はあっけにとられた顔をした。構わないとはどういうことかと無言のうちに訴えているのがありありと伝わってきていた。

私、あなたを愛しているんです。あなたと少しでいいからこうやって会えるだけで、私、とても幸せなんです。絶対にその娘さん、いいえ奥さまですね、彼女に嫉妬なんてしたりしません。あなたがその方を愛そうと、その方との間に子を成そうと、私は絶対それを邪魔しません。邪魔をしそうになったら私を殺してしまっても構いません。私、あなたを愛しているんです。あなたのことなら全て受け入れます。ですから、私を捨てないでください。私、あなたのためなら何だってしますから。

涙を流しながら私は彼に縋りついた。彼の胸は暖かく、大きく鼓動を打っていた。

結局、彼は私を振りほどくことが出来なかった。

それから彼がおかしくなるのは早かった。

彼は何よりも証拠を欲しがった。

どんなに崇高な思考でも、実感がなければただの虚言だろう。君は違うかもしれないが僕はそうなんだ。嘘なんかじゃないと信じたいたいんだ。君のあの言葉が本当だと信じたいたいんだ。僕は君の愛が欲しい。

そう言われたこともあった。

電話で、手紙で、彼は私に訴えた。日く、それが彼の愛なのだ。本当にそうなのだったかは知らない。私はそう言ってもらえること、それ自体が重要だった。彼の振る舞いが私に起因するということを確認できる瞬間だった。

私は彼の求める愛を示す為、ありとあらゆることをした。

彼は私の目を欲しがった。

僕は君の目がとても好きなんだ。でも、二つあるってことは二つ視野があるってことだろう。その両方を僕が独り占めできたらいいんだけど、そうじゃなくなったら僕はどうすればいいんだ。女は男に抱かれながらも別の男のことを考えられるっていうじゃないか。君の二つの視界が、その片方が、僕以外を考えないって信じられないんだ。

それなら、私の目を片方取ればいいじゃないですか。そうすればあなたのことを見つめる目だけが残る。

半ば冗談のつもりで私はそう答えた。けれど、彼は本気だった。

僕の知り合いに腕のいい眼科医がいるんだ。そいつに君の目を取ってもらおう。そうすれば安全だ。あいつは僕に恩があるから、そのくらいしてくれるさ。明日、電話で聞いてみよう。今は夜だから、近く消え去る君の両目のための時間にしよう。お別れを告げなくちゃいけない。お別れの光は月明かりがいいだろう。

彼は家の電気をすべて消して私を窓際へと連れて行った。

綺麗な目だ。

それだけ言って、月が沈むまで彼は私の目を見つめた。肌の上を這う手が、果実をもぎ取る農夫のように感じた。乱雑で、繊細な手つきだった。

翌朝、疲れ果て眠気にとらえられた私を置いて彼は帰って行った。テーブルに一枚、私の右目の命日をつづったメモを残して。

私の右目はそうして消えた。

彼は私の左手の薬指を欲しがった。

君の指に結婚指輪がはめられていることを考えると気が狂いそうになるんだ。僕は君にそれをあげられないから、きっと君の左手の薬指に指輪がはまる時は君が僕を愛さなくなったときなんだろう。そんな日は来ないって君は言うけど僕はそれを信じられないんだ。君の左手の薬指、そんなものがどうしてあるんだろう。

いつかの右目の時の様な雰囲気、私は彼のための夕飯を作る手を止めた。火を止め、テーブルの前で待つ彼の下へ向かった。

こんなもの、あなたにあげます。私は言った。彼は驚いた表情を装いながら微笑んだ。

水でとことん冷やしてから切ると、痛みは随分とましになるそうだよ。末端部分であれば目の時の様に専門医の手を借りなくても、僕にだって治療の真似事くらいはできるんだ。

そう教えられ、彼の目の前で彼の言うとおりにした。

確かに、切る瞬間の痛みはあまり感じなかったが、段々と血流がめぐり、感覚が甦るとただただ痛かった。

泣きながら痛みに耐えていると、彼は血の滴る私の傷口を舐めた。

ありがとう、愛しているよと繰り返しながら彼は私の指は無くなったのだと知らしめるように傷口を舐め続けた。もう大丈夫だろうかと彼がその行為を止めたのは夜明けだった。

※

彼はいつも思い悩んでいた。仕事でかけられるプレッシャー。彼の独立を支援した義父の失脚。妻と、その間に生まれた息子との関係。そして、なによりも私との歪な繋がり。

どれか一つでも彼の世界から無くなればきっと彼は心安らかに暮らせるだろうことは分かっていたが、私は決してそうすることはなかった。

私の親は恩人であり、そして同時に親代わりだったと彼は語った。

親に恵まれない家庭に育った彼はいつか幸せに生きることを夢見て勉学に励んだが、それでも金や保証人と言った問題の前に努力が崩れ去りそうになった。そこで手を貸したのが私の親なのだそう。

彼の遠い親戚と名乗る私の親は彼を引き取り、この家から学校に通わせ、学費や生活費も援助した。彼が思い悩み挫けそうになった時は叱り飛ばし、彼が道を踏み外さないように強く支えた。同時に彼が一人でも生きていけるよう、厳しく当たることもあった。だが、彼はいつも優しさを感じていたそう。彼はどうやって自分を私の親が育て支えてくれたかについて事細かに私に教えた。

君はまだ幼かったから覚えていないだろう。でも、君の親は本当によくできた人なんだ。僕の恩人なんだ。

私は彼と私の親に関して、ある意味彼よりもよく知っていた。だからこそ彼が私の親に感謝しなければならないなんてことは決してないと信じていた。あの二人は決してできた人間なんかではないことを知っていた。

私がそれを伝えると彼は珍しく、というよりも初めて激昂した。怒りは予想していたが、それを上回る激しさに私は怖気づいた。

あの人たちは僕の恩人だ。君は私の恩人たちにとって何よりも大事な宝物なんだ。宝物の君が、僕の恩人を侮辱しているわけがない。

彼はそう叫んだ。めちゃくちゃだった。ならばその宝物の体を奪う彼は何なのだろうか。そもそも、彼は私との関係の本当の意味を知らない。そのくせ偉そうに私と私の親のあるべき姿を語るの、はつきり言って馬鹿らしかった。でも、それを言ったら何もかもお終いなのだと私は知っていた。

私は彼に謝り、以来この話題には触れていない。

※

彼に会えなくなってからもうどれほど経っただろう。真っ白に輝く日差しが私を焼く中で、最後に会った日のことを思い出す。あの日はいつもにもまして様子がおかしかった。あの日は今日と正反対に真っ黒な日だった。

雨が激しく降る夜だった。彼は酷く怯えた様子で私の家へ来た。彼が私の家に来る時はいつもそうだった。彼は何かに追い詰められるたびに私の所へ来た。いつものことだった。

どんなことがあっても私は彼を愛している。そのことを確認して、私が最後の砦として彼を受け止めると信じきることが出来たら当たり前の顔をしてまた日常に戻っていくのだ。彼は自分の全てを受け入れてくれる誰かが必要だった。かつてはそうではなかっただろう。変わってしまったのはきっと私の存在のせいだ。

私はそんな彼が愛しかった。そうやってどんなに弱くなろうとも、生きていく彼が好きだった。植物がどんなに捻じ曲がろうと太陽に向かうことを決して諦めないように、どんなものでも自分が生きていくのに必要となれば必死に求める彼が赤子のように見えた。

その夜、彼は傘も差さずに来たらしく、上等そうなスーツがびしょ濡れだった。何も言わずに私の家に上がり込んで、そのまま居間の椅子に座りこんだ。椅子の上に置いてあったクッションまでびしょ濡れになったが、それを口にしては彼の機嫌を損ねてしまうことは確実だった。

私が彼の向かいのもう一つの椅子に座ったことを確認すると、彼は何度か落ち着かなげにもぞもぞと動いた。何か言いたいことがあるのだろうと私はじっとその時を待った。

一緒に死んでくれないか。

待っていた私に与えられたのはこれまでよりも更に変わった願いだった。私は返事をする事が出来なかった。彼はそれまでどんなことがあっても時も死にたいと言うことはなかったのだ。何も言うことが出来ない私はまた次の言葉を待った。

五分ほど沈黙が続いたかと思うと、彼は先ほどより強く、一緒に死んでくれないかと言った。いつも了承の返事ばかりを返していた私だったから、彼は焦りを感じたのだろう。

私は首を振った。

死にたくなかったというのもあるが、それ以上に死を望む彼に腹が立ったのだ。私は汚らしく生きようとする彼が好きだった。それを裏切る彼は、私の積み上げた全てを否定しているように感じた。

私のこと、奥さんに知られたんですか？

思い当たる理由といえばそれだった。彼は何も言わなかった。肯定だった。私のことを知られ、そして罵られ追い出されたのだろう。いつかそうなるかもしれないとは思っていたが、いざ現実になると腹の底が落ち着かなげに動くような気持ち悪い感覚に襲われた。

私は現実を笑い飛ばすように彼に語りかけた。

死ぬなんて言わないで、この家に逃げてきたらどうですか。私の親の財産もあります。庭には畑があります。二人でなら、一緒に野菜でも作って、この家で生きていくことができます。

彼を受け入れるばかりだった私にしては拙いばかりのこの言葉でも、随分と勇敢な行動だった。彼はそれを静かに聞いていた。服は濡れたまま、袖の先から一滴ずつ雫を垂らしていた。

だから、私、あなたと死ぬのは嫌です。

結局、私の思いはその一言に尽きた。

彼は嫌だと答えた私をじっと見つめた。怯えた小動物の様な、いや、それ以下の目をしていて。私はただそれを受け止めた。彼へのせめてもの敬意でもあったし、威嚇のような気持ちもあった。暫くそうした後、彼の方から目を逸らした。

帰る。

そう言って彼はのろのろと私の家を出て行った。全ての動作を遅くして少しでもこの家に留まろうとしているようだった。私が先ほどの発言を翻して、一緒に死ぬ事を了承するのを期待していたのだろう。

けれど私はそうはしなかった。死にたくなかった。彼が私の家の玄関から出ていく音を、私は居間のソファに座ったまま聞いた。目の前の彼が座っていたクッションにできた染みが乾くまで、ずっとそうしていた。雨音が強くなったり弱くなったりしているのを聞いていると退屈しなかった。

クッションが乾いたころには弱い光が居間に差し込んできていた。青白い光だ。私はじっと動かないまま夜を過ごしていたのだ。雨はいつの間にか止んでいた。

そういえば彼は玄関の戸を閉めてくれただろうかと気になり、私は立ち上がって玄関へ向かった。どうでもいいことが気になるものだとし可笑しかった。痺れていないけれど、久しぶりに体重を支える足は不思議に浮き上がるような

感覚を私の脳へと訴えた。

玄関は案の定というべきか、彼の最期の嫌がらせだったのか、大きく開け放たれていた。私はため息をつきかけるがすぐにそれを飲み込むことになった。そこから見える異常に気付いたからだ。

私が開け放された玄関をそのままに庭に出ると、そこには倒れている彼がいた。一晩中雨に濡れ続けていたのだろう、触れた体は冷たかった。きっと芯まで冷えていた。彼の手元に薬瓶が転がっていた。過剰摂取すれば死ぬことが出来ると、以前私が雑談で教えた薬だった。

あまりにもくだらない。

段々と強くなる光に新聞なんか取らなくていいと彼が言ったことを思い出した。本当にその通りだとぼんやり思った。

※

トマトをもぎ取る。もう収穫してもいい位に育ってくれた。太陽の熱を孕んでいるせいで生温かい。まるで人の肌に触れているようでぞっとする。彼と一緒にいたあの頃の私もそう思っただろうか。

彼は本当に臆病な人だった。卑怯な人間だった。他人に対しては自信に満ち溢れているように見せかけていたが、本当は自分に一切自信を持っていなかった。自分より上だと認識した人間には滑稽な程に媚を売っていた。変なところで頑固だった。周りの意見に流されてばかりだった。

外面は世界一とばかりに美しく取り繕うくせに、その皮を剥げば中身は溶けて腐ってなにもなかった。

私が愛した彼の中身はただただ赤黒いばかりで何もなかったのだ。知っていたのに知らぬふりをした自分が悔しかった。そんなことをしなければ私は彼に執着しないですんだのに。私は自分が嫌いだった。私と全く同じである彼をもっと確かに認識してさえいれば結末は変わったはずなのに。

私は彼を愛してしまった。どんな形でも彼に触れられる関係であることに満足を感じてしまった。それは私の罪だろうか。

もう一つトマトをもぎ取る。葉は大げさな程に揺れるくせに、太く地面に根差す茎は折れようとする素振りさえ見せない。健気だと思うし、生意気だとも思う。

じっと手の中にあるトマトを見つめる。トマトには何の表情もない。ただ黙ってそこにある。放っておけばいずれは腐って土に還る。

彼と、同じように。

私は庭で死んでいた彼の死体を、そのまま庭に埋めた。警察に通報はしなかった。面倒だったというのもあるが、それ以上に彼の体を他の人に渡したくなかった。それに、警察が彼の死体を引き取ったらきっと彼の死体は火葬にされてしまう。私は彼の死体が燃やされるのは嫌だった。

私の親は焼かれて消えた。人の住む場所から切り離されたところで、世界から隠すように燃やされた。時間が経つのだけを待って、真っ白で軽い骨の形の灰を見せられて、それで終わりだ。それを拾うにしても、小さな壺には結局全部は入りきらない。あの時壺に入りきれなかった私の親たちはどこへ行っただろう。

彼があんな風になるくらいなら、こちらの方がまだマシだ。彼はここにいる。この土の中にいる。

彼が土の中に住まうようになってから一体どれほどの時が経っただろう。土はあの時と変わらない色をしている。少し乾いた土。触れた指の先にここは暑いと熱を伝える。夕方になって涼しくなったら、水を遣らなければ。

もぎ取ったトマトを一口齧る。外側はやはり生温かいが、中は少しひんやりとしている。

彼は知っていただろうか。私と彼の本当の関係に気付いていただろうか。

トマトの味がじわじわと舌にしみ込んでくる。酸っぱい。

トマトの中身が嫌いだ。気持ち悪い。このどろどろなんて消えてしまえ。こんな未熟な種を抱きかかえて、一体何を考えているのだろう。その中に彼を吸い上げて、我が物顔をして一体どうしようというのか。彼を返せ。彼を生きた状態で私に差し出せ。生きていて、私を愛してくれる彼を差し出せ。

それが叶わないというのなら、全部私が食ってやる。彼を吸い上げたお前を私が食って、私の中に彼を少しずつ溜め

ていくのだ。私たちは一つにならなくてはいけない。

彼は、私の兄だった。比喩などではなく、本当にただ純粹に、彼は私の兄だった。

15のときに両親に教えられたのだ。私が生まれるよりも随分と昔、まだ父と母が少年であり少女でいられた頃、二人の間には男の子が生まれた。何の力もない二人はその子を奪われた。行方は知らされなかった。

積み重ねた年月が彼らに成長と老いをもたらすほどの時間が過ぎたころ、私の親は結婚をし、地位と財産と私という子を得た。自分たちは冷静な大人になったのだと信じる事が出来るようになった私の親はかつての自分達の子どもを探した。そして見付けた。

不幸な身の上となっているその子供を私の両親は自分たちが親であるということを隠して引き取った。それが彼だ。

私はそのことを知っていたのだ。だからこそ私の親に同情と懺悔と共に語られた彼に興味と嫉妬を抱いた。

私の親は私以上に彼と彼の不幸を愛した。自分達から引き離され憐れな環境を生き延びた彼の全てを褒めあげ、彼と異なる部分を私に見出すたびに嘆いた。彼とは違い実の親に愛され育つお前は幸福であり、だからこそ弱い人間なのだ。困難を経験したことのないお前は彼よりも弱く脆く劣っている。お前も彼の様に不幸に負けぬしたたかな人間にならなくてはならないのだ。彼と同じようにならなくてはならないのだ。

私より恵まれない状況に生まれた落ちたくせに私よりもしっかりと人生を歩み、親の死に将来を振り回されないで済む彼を、私は傷つけてみたかった。幼いころに見ていた彼の幸せそうで立派だった彼の幻影を壊したかった。弁護士として私を助ける彼を見るたびにその思いは強くなっていった。

あの日、私は親に真実を告げられたあの客間で彼に実験を試みたのだ。試練を与える神のような気持ちだった。私は彼の性愛対象として自分が有効であることを知っていた。そのための行動も十分に事前にしっかりと彼に向けて行っていた。

あの時、彼は私を乗り越えることが出来るのだろうかなどと思いあがったことを考えていた。

血のつながった兄妹は、そのことを知らない状況で出会うと他者よりも強く惹かれあうと言う。一方でその逆の状況であれば互いへの性的接触に関して強く嫌悪を示すと言う。

私は知っていて彼は知らなかった。実験は失敗だった。試練を与えられたのは私だった。

私は彼を愛してしまったし、彼の本当の感情についてはもう知る術はない。彼が私と兄妹であることを知っていたかも分からない。でも、彼が死んだ理由に、私の存在があったのは確かだった。

今さらどこへも行けない。この家を捨てることもできない。私は世界から随分と遠く離れた所へ来てしまったのだ。

ならば彼と一つになろうではないか。どうせ彼が最も慕う私の親にとって私と彼は同じだったのだ。同じであるべきだったのだ。

※

何度目になるのか、もう分からなくなってしまった問いを私は未だに飽きることなく繰り返す。結局私は何も分からないのだ。私はきっと誰よりも彼のことを知っていたけれど、この世の誰よりも分かっているのではないのだろう。当然と言えば当然かもしれない。私は彼をあまりにも残酷に扱った。その報いに、私が答えに行き着くことはないのだろう。それでも諦めきれないのは未練と言うべきか執着と言うべきか。

どうして彼は死んでしまったのだろうか。どうして私は生きているのだろうか。

あの時一緒に死ぬことを受け容れていたなら、彼は生きていただろうか。私が死ぬと言ったらそれだけで怖気づいたかもしれない。そうしたら彼は死ななかつただろうか。冗談だと言って、笑つただろうか。

今とは反対に私が死んでしまって彼が生きていたら、彼は心から笑うことが出来たのだろうか。

それとも彼が生き残るなんてことはなくて、結局死人が二人に増えるだけだったのだろうか。それが、一番きれいな終わり方だったのだろうか。彼がしようとしていたことは正しかった。

自分の事を馬鹿だと誰よりも馬鹿にしていた彼。人間の欠陥品だと言っていた彼。本当にその通りだった彼。それでも、優しくった彼。取り繕いや誤魔化しのための優しさがほとんどだった。もっと自分を見てもらうための、つまらない優しさだった。それでも彼の中には優しさがあったのだ。私に何よりも足りなかった優しさが、彼の内には確かに息づ

いていた。

彼の優しさが大嫌いだ。そのせいで私は今も、どこにも行くことが出来ない。そんなものが彼になれば私はきっとこの場所を捨ててどこかに行くことが出来たのに。

彼の名前を呟く。掠れた声しか出なかった。その声に私が込めたのは恨みなのか愛しさなのか自分でももう分からなかった。

彼はもう戻ってこない。私が彼に捧げた愛もどこかへ消えた。なくした右目、左手の薬指。二つとも、彼の死と共に意味のないものになり果てた。私の一部は、彼と共に死んだのだ。残された私は、どこかに消えたかつての私たちがどうしようもなく羨ましい。

私に残っているのはこの庭と、彼への気持ちの記憶だけだ。跡しか残っていないのに、どうしてこんなに苦しいのだろう。

彼が勝手に死んだだけだ。私にはどうすることも出来なかった。どれほど言い聞かせても私は結局納得しないのだろう。

太陽は私を焼くように照らす。生ぬるく湿気の多いばかりの風は不快だ。土は黙ったままで、トマトは私に構うことなく土から彼を吸い上げる。

この土の中に眠る彼。一体どんな姿になっているのだろう。もう骨になってしまったのだろうか。その骨の間をミミズ達が這いまわっているのだろうか。かつて肉と内臓が占めていた場所はもう、土に侵されてしまっているのだろうか。

そうだとすると私にはどうにもできない。そもそもこの世界で私がどうにか出来ることなんて何もない。私は欠陥だらけなのだ。何も分からないまま右目と薬指を差し出して、そのまま今なお生きている。私が持つものはたった一つ、知っているということだ。彼がこの中にいるという事実だけは私の物だ。何も知らない世の人々が私を知ったらどう思うだろう。

私は赤い実をつける植物が羨ましかった。眠る彼に根を延ばし、彼をその中へと絡めて吸い上げていることが。彼を餌としながら安らかに静かに生きていられることが。

土の上に寝転がる。髪や服が汚れるが、そんな事はどうでもよかった。空を見上げれば雲のほとんどない青空だ。目が痛い。

馬鹿らしかった。こうやって色々と考えている事も、生きている事も。

不思議と涙が出てくる。きっと太陽が眩しすぎるのだろう。このまま太陽を見ていたら残った左目も失われるだろうか。左目は私の意思など無視するように涙を滲ませる。

土の熱が背中越しに伝わる。確か今日の気温は人の体温と同じくらいだった。そのせいか、彼と今、背中を合わせているような気持ちになる。

今日は何もかもが鮮やかだ。空も、太陽も、光も、影も。深呼吸をすると、蒸れた青臭い空気が胸いっぱいに入ってくる。こんな日なら死んでやってもよかったかもしれない。

もう一度彼の名を呼んだ。彼が生きていた頃は一度も呼ぶ事の出来なかった名前。何もかえってこないからこそ、私はようやくその名を自由にできた。彼が生きていたころ、私は何よりもその名を愛していたのに。汗がぼたりと一筋地面へ飲み込まれた。

目を閉じた。瞼を透過する光が眩しい。あの青空から降る光だ。このままじっとしていれば、私も土に溶けてしまえる気がした。

Trip Break 3



癒しの島、与論島。沖縄県によく間違われるが、実は鹿児島県である。よろんとうと読まずによろんじま、と読んでもらいたい。

沖縄から、大きな船に揺られること、約2時間。鹿児島県最南端の海に囲まれた小さな島は、気候は年間平均気温22.8度と温暖な亜熱帯気候。白い砂浜に、どこまでも続く青い海。まさに、天国のような場所である。

ここで、マリンスポーツをするのもいいだろう。透明な海では、色鮮やかな魚や、サンゴ、それに運が良ければウミガメと出会うこともできる。由比ヶ浜に、星の砂を拾いに行くのもいい。星の砂を年齢の分だけ拾えばいいことが起こるというジンクスもある。

しかし、私は、与論島ではあえて何もしないことをお勧めしたい。ゆっくりと、何も考えずに散歩をすること。これが、案外贅沢な時間の過ごし方であ

るように思うのだ。

海に囲まれている島だから当然だが、与論島にはビーチがたくさんある。人気のあるところはそれなりに人も多いが、そこら中に浜辺があるので、静かな場所もあったりして、ぼうつとするのにはそれがまたいい。そして、なんといっても自然が多い。緑は浜辺の傍まであるし、いたるところに畑がある。しかし、へんぴというわけではない。スーパーもあるし、手作りのおいしい食事処もあるのだ。

太陽の暖かな日差しと、豊かな緑、そして、美しい海。次に旅行をするときは、与論島で過ごしてみてはいかがだろうか。

文・写真／藤谷りほ



秋風ゆれる

なかの空き地



皐(さつき)は半田(はんだ)駅の駅舎を出ると、日差しの強さに思わず目を細めた。

時は9月下旬。真夏のようなじめつとした湿気は無く、日陰では涼しさを感じる。見上げると雲ひとつない青く澄んだ空が広がっており、まさに秋晴れといった感じだ。しかし照りつける太陽の下ではやはり暑さが勝り、秋と呼ぶのは少しためられる。

「ねえ、どっちに行けばいいかわかる？」

声がした方を向くと姉の菖子(しょうこ)が皐より先に駅舎から出て、次に行く道はどちらかと案内板と周りの光景を見比べきよろきよとしていた。左右に頭が振られるのにあわせて後ろで一つに束ねられた髪が揺れている。皐はそんな姉の姿を見て、一瞬目を見開き息を呑んだ。しかしすぐに首を振り、一度自分を落ち着かせるため深呼吸をしてから家で印刷してきた地図を鞆から取り出す。

「えーっと、まずはこっちかな？」

地図の向きを駅と線路を見ながら進行方向にあわせ、いまだに案内板の前で首をかしげている菖子を見無視して皐は歩きはじめた。

愛知県半田市。皐は名古屋市から電車で約40分かけて、この街へやってきた。

待ってよ、という姉の声を背で聞きながら、皐は菖子が立てた簡単な計画と事前に調べてきたこの街の概要を思い返す。

知多半島の東岸に位置する半田市は鉄鋼業や酢や酒の醸造業が盛んである。特に醸造業に関しては、江戸時代に多くの蔵が建てられ、その中には現在博物館や資料館として開放している蔵もある。皐は時間に余裕があればそれらの蔵も訪ねたいと考えていた。

因みに、最初の目的地は新美南吉(にいみなんきち)記念館なのだが、半田駅から記念館までは3 km以上あり、徒歩で約40分かかる。菖子がこの旅の計画を立てていた時、バスなりタクシーなり何らかの交通手段を使うのかと思い菖子に尋ねたところ、

「歩くつもりだよ？ こういうのは歩いたほうが楽しいし」

と、当然のように言われた。後から皐が自分で調べたところ、半田駅より記念館に近い私鉄の駅もあるようだ。しかし旅の計画を立てていた菖子の意思に反するのは、この旅では望ましくない。そのため皐はこうして最寄りではない駅から歩いて目的地に向かっている。

一

きっかけは8月ももう終わろうという頃に菖子が居間で旅行ガイドを広げていたことだった。

「姉さん、何見てるの？」

「んー、旅行ガイドだよー」

「いやそれは分かるけど、どこの？」

菖子は見ていた雑誌を広げたまま顔の前まで持ち上げ、菖子に表紙を見せる。そこには大きく目立つ色合いで『愛知』と書かれていた。

「愛知って、何でここのガイドブック？ 誰かの案内でもするの？」

皐が尋ねると菖子は首を横に振り、雑誌を裏返して皐が声を掛けた時に開いていたページにもどす。

「ここに行ってみたいと思って」

菖子が指差した先には比較的大きい文字で『半田』と書かれている。半田の名前は聞いたことがあるし、愛知県内にある街だという事も知っている。ただ、具体的なイメージは浮かんでこなかった。ピンときていない様子の皐をみて菖子は説明してくれる。

「皐は新美南吉って知ってる？」

「『ごん狐』の？」

「そう。その新美南吉の生地が半田市で、記念館もあるんだよ」

知っている童話の作者が意外と近くの出身で少し驚き、へえ、と感心する。本をあまり読まない皐が知っている作品

ということは、姉が幼少のころに薦めてきたのか、そうでなければ教科書にでも載っていたのかもしれない。しかし、肝心の「ごん狐」の内容を思い出そうにもぼんやりとしか浮かんでこなかった。

2

日差しが思ったよりも厳しく、日傘を持って来るべきだったかなと、少し後悔しながら歩いていく。

「皐、最近どう？」

地図を見て公園が進行方向にあるからこの方向で合っているよな、と確認していた時にいきなり菖子から質問をされ、皐は地図から顔を上げる。

「どう、といわれても……」

不意の質問だったので思わず答えかけるが、その答えもすぐには浮かばず尻切れトンボになってしまう。

「まあ、なんとか、やってるよ……」

皐が視線を逸らし曖昧な返事をする、菖子は「そっか」と苦笑して頷いた。

「……」

「……」

二人の間に沈黙がおりる。話すべきことがあるのは確かなのにどう切り出せばよいのか分からず、もどかしい。視線だけで菖子の様子を窺うも、先ほどの苦笑いを浮かべたまま視線は進行方向を向いており、いまひとつ何を考えているのかわからない。気まずさから逃れるように皐はもう一度地図に視線を戻し、歩を進めようとした。その時、前方からボールが転がってきた。すぐに子ども特有の甲高い声が耳に飛び込んでくる。

「ボール、そっち飛んでいったよ！」

取りに行くー、という声が続く、小学生らしい男の子が前方右手側の公園から飛び出してきた。道を歩いている皐達のことは全く視界に入っていないようで、男の子と菖子がぶつかりそうになる。

「危ない！」

と、皐は思わず声をあげる。しかし、男の子は菖子にぶつからずに通り過ぎた。ボールを拾い上げた男の子はいきなり声をあげた皐の顔をじっと見て首を傾げた。

「おねえちゃん、今なんで――」

「はやくー！」

公園内からの男の子への催促の声が聞こえ、男の子は慌てて「じゃあね」とだけ皐に言って公園へ駆けていった。

「道路には飛び出さないようにねー！」

菖子は去っていく男の子に声をかけるが、男の子はこれには特に反応せず一目散で公園に戻っていく。

「やっぱり――」

三

菖子は昨年まで地元の大学の文学部に通っており、特に児童文学に興味があった。卒業論文も「児童文学の変遷」というテーマで書いたようだ。そのため、半田市に訪れる理由は新美南吉の縁の地であることが大きかったのかもしれない。しかし、皐は違う。

9月中旬頃、あの日姉が半田市に行きたいと言っていたことを思い出し、なんとなく気になって半田市をネットで検索をかけてみた。検索で引っかかったページの中からタイトルに惹かれ適当なブログにカーソルを合わせクリックする。そのページを開いた瞬間皐の目に飛び込んできたのは――赤色だった。

写真に広がる一面の赤。その色は毒々しいまでの鮮やかさで自己主張をしながらもどこか儂げで皐の心を締め付けた。よくよくそのブログを読んでもみると矢勝川(やかちがわ)という知多半島を流れる川の堤防に100万本の彼岸花が毎年咲くらしい。写真の中の赤色は有無を言わせないものを持っていて、皐はただただ圧倒された。

この赤色に後押しされ、皐は今、半田の地にいる。

「新美南吉記念館ってあれかな？」

考え事をしながら歩いていたため、突然の菖子の声に驚き、皐は菖子の顔をまじまじと見つめた。

「わたしの顔に何かついてる？」

菖子は皐の形相に驚いたように、皐の眼を覗き込む。皐は首を振り、そのまま菖子が指差していた先に視線を移すと、緑に覆われ緩やかにカーブする丘が目に入った。よくみるとその丘には断面があり、その断面が白いコンクリートや窓ガラスになっているのが見える。記念館と称される建物にしては珍しい前衛的なデザインだ。建物の後ろには公園等で見られるようなこじんまりとした森がある。

「面白い建物だね」

目的地が見えたことで心なしか足を動かす速度は早くなった気がした。

「『ごん狐』ってさ、前半と後半で印象変わるよね」

記念館に辿り着いた皐は観覧料を払ってから入場した。館内では「ごん狐」も含めた様々な作品のジオラマや新美南吉の原稿などが展示されている。これら見て回りながら菖子は「ごん狐」について皐に話してくれた。話している菖子の姿は、二人が幼かった頃、好きな絵本を持ってきて「この本おもしろいんだよー」と言って目を輝かせながら話していた姉の姿と重なり、ひどく懐かしかった。

「ごん狐」のあらましはこうだ。最初はいたずら好きの小狐ごんが、兵十(ひょうじゅう)がしかけをして捕まえたうなぎを逃がしてしまう。兵十がごんのしかけへのいたずらに気がついたとき、急いで逃げようとしたごんの首にうなぎが巻きついてしまう様子などが生き生きと描かれている。

「前半ではちょっとしたいたずらという感じで、少しほほえましくすら感じるのにね」

いたずらをした十日後、兵十の家の中に大勢の人が集まっている様子をごんが見かけた時から物語の雰囲気は一変する。ごんは兵十のおっ母が死んだことに気がつき、自分がいたずらをしたせいで兵十がおっ母にうなぎを食べさせてあげられなかったことを反省した。ごんは一人ぼっちになった兵十にいろいろなものを持っていくようになる。

「ごんは兵十のおっ母がうなぎを食べたいと言ったと考えていたけど、これはごんの想像でしかないんだよね。実際はどうだったのかは分からない」

それこそ、死ぬ時に何を思っていたのかなんて死んだ者にしかわからないものなのかな。そう話す菖子の目線は、兵十が自分が撃ったごんの元に駆け寄り、おっ母が死んでからのおくりものに関する真相を知る姿に注がれていた。

記念館の裏には「ごん狐」の舞台となった中山(なかやま)があり、現在は童話の森として遊歩道が整備されている。皐達は館内を一周して記念館の裏にやってきた。早速森を散策しようとする菖子を皐は少し強めの声で呼び止める。

「姉さん」

んー、と菖子は振り返って皐の方を見る。笑ってはいるのだが、その笑顔に少し翳があるような気がしたのは皐の思い込みだろうか。

「あの、もうそろそろ、ちゃんと、話したい」

緊張で固くなりながらも自分の意志が伝わるように一語一語はっきりと告げる。言った勢いで菖子の手を掴もうとするが躊躇いが生じ、伸ばしかけた手を引っ込めてしまう。ついて来て、と短く告げ菖子を伴いベンチへ向かった。

ベンチの上に積もっている埃や枯葉を手で簡単に払い腰掛ける。木でできたベンチは陽だまりをうけてほんのりと温かかった。

このことを尋ねればもう後には戻れない。

皐は緊張をほぐすためにハア、と小さく息を吐き、隣に腰掛けた菖子をまっすぐ見つめた。そして半田駅に降りた時からずっと皐月の心の中にあった疑問を投げかける。

「どうして死んだはずの姉さんがここにいるの」

「ねえ、皐も一緒に行かない？」

皐が居間でテレビの情報番組を見ながらくつろいでいると、菖子が扉から顔を出して声を掛けた。手には先日の旅行ガイドがある。

「行かない」

皐が即答すると、菖子は口を尖らせて皐が座っている対面に座りこんだ。

「えー、行こうよ！」

「姉さん、テレビが見えない」

皐がそっけなく返すと今度は皐の手元にあったりモコンを掠め取り、どうせ流しているだけでしょと言いながらテレビの電源を切ってしまう。

「ちょっとは行くのも考えてみてよ」

菖子は文句ありげに主張するが、文句を言いたいのは皐のほうだ。ただ、こうなると、文句を言うより聞いたほうが早いことは生まれて以来の付き合いで十分にわかっているのも、仕方なく菖子と向き合うように座りなおす。

「だって、童話とか私はあまり興味ないし」

「んー、でも皐も来年は就職するし、こっちにはなかなか戻って来れないんでしょ？」

今は夏休みのため帰省しているものの、皐は関西の大学に在籍しており、就職も関西の企業で内定をもらっている。対して菖子は名古屋の企業に勤めており、現在は実家暮らしだ。比較的自由な時間の多い今と違い、なかなか一緒に出かけるといったことができなくなるのは確実だった。

「せっかくだし、機会があれば一緒に旅行ぐらいしたいなあと思ってね」

あまり乗り気はしないものの、そういう理由を出されると無碍に断るのも躊躇われる。まあ考えておく、とだけ言い置いて押し切られる前に皐は居間を出て行った。

これが菖子と交わした最後の会話だった。

『ごん狐』の兵十のおっ母の葬式と違い、菖子の葬儀の日、皐の家に大勢の人が集まることは無かった。しかし、葬儀ホールには故人の職場の同僚や上司、友人など多くの人が集まった。自分の家だったらこんなに人が集まっても入らなかっただろう。姉さんって人付き合い良いと前から思っていたけど、ここまでとは思わなかった。一通りの挨拶を終えた後、祭壇から少し離れたところで立ち、黒い人ばかりを見ていた皐はそんなのきなことをふと思った。自分の考えが場に合わないことを自覚すると、焼香の匂いがきつくなかった気がした。もともと焼香の匂いは嫌いではない。そのはずなのに、何故か今はホールに蔓延するそれがひどく気持ち悪い。匂いはトイレに行っても、ホールの外に出てもまわりついて来て、現実を見ろ、と皐に訴えるようだ。

「現実……」

菖子は皐と旅行の話をした約十分後、信号無視の車に撥ねられて――死んだ。皐と話した後近所のコンビニに行き、そこから帰ってくる途中だったようだ。すぐに事故現場を目撃した人によって救急車が呼ばれ病院に搬送されたが間に合わなかった。皐は事故現場を目撃した近所の人によって呼ばれ、救急車で一緒に病院まで付いて行ったらしい。らしい、というのは正直菖子が道路に頭から血を流して横たわっているのを見てからのことはほとんど覚えていなかったためだ。

覚えていないながらもやることはやっていたらしく、両親と共に色々な手続きや手配をし、こうして菖子の葬儀を執り行っている。

姉妹の仲は悪くなかった。むしろ、皐自身にはそんな自覚はなかったが、友人との会話で菖子のことが話に上がったとき「お姉さんと仲良いね」と評されたほどだ。それなのに実感が伴わないせいか涙も出てこない。

「姉さんは、もうこの世にいない」

声を出して呟いても、言葉だけ宙に浮いて霧散してしまい悲しみは湧いてこない。でもこれは、紛れもない現実だった。

死んだはずの菖子がここにいる。それはありえないことのはずだ。しかし今、菖子は皐の目の前にあの日と同じ服装で確かに存在している。

「どうしてここに居るんだろうね？」

「はぐらかさないでよ」

「はぐらかしているわけじゃないよ。私がどういう存在なのか、どうしてここに居るのかは自分でも分からない。所謂幽霊ってやつかもしれないし、皐の妄想の類かもしれない」

どちらにしろ「私」は「私」としてこうして皐とあって話せているんだから構わないんだけどね、と話す菖子は虚勢を張っているわけではなく、本当にどちらでも良いと考えているようだった。

「わたしにとっては大違いだよ」

菖子の適当な言いように皐は頭が痛くなる。

「まあ、でもどうしてここに居るのかは、仮説がないわけではないんだけど——」

菖子の言葉に驚き、皐は抱えていた頭を勢いよく上げた。

「どんな仮説？」

「いや、突拍子もないのは自分でもわかっているけど.....もしかして、彼岸花が引き合わせてくれたのかなって」

「彼岸花？」

どうしてここでいきなり彼岸花が出てくるのか分からず皐は首をかしげる。

「皐は彼岸花が見たくてここまで来たでしょ？」

「どうして姉さんがそれを知っているの？」

皐が矢勝川の彼岸花のことを知ったのは菖子が死んだ後だ。

「まあ、その地図を見ればね」

菖子は皐の膝元に置かれた地図を指差す。幾つかの目的地に丸印が打たれていたが、矢勝川堤防には大きく何重にも丸が打たれ、他の目的地よりも強調されていた。確かにこれは分かりやすいと、皐は自分のことながらも納得する。

「彼岸花の花言葉って知ってる？」

生憎、皐にはそういう系統の知識には乏しく、菖子の質問に素直に首を横に振る。

「まあ、『情熱』とか『独立』とかいろいろあるんだけどね、その中のひとつに『再会』って言うのがあるんだよ」

「再会.....？」

「そう。だから、皐が心を惹かれた彼岸花が、こうして私とさつきを引き合わせてくれたのかなあ、って」

本当に根拠も何もない思いつきなんだけどね、と付け足す菖子の顔には困ったような笑みを浮んでいた。菖子の想像した理由にはすぐには納得しかねたものの、どういう理由であれこうして目の前に菖子が居るのには変わりがない。そのことを認めてしまえば、何故菖子がここに居るのかとか、どうでもいいような気がしてきた。

「そうかもしれないね」

皐は立ち上がり菖子へ手を伸ばす。菖子は皐の手をとり立ち上がる。握った菖子の手は柔らかくも冷たかった。

皐達は新美南吉記念館の敷地から出て矢勝川に向かう。ここまでくれば矢勝川はもう目と鼻の先だ。

「こんなこと聞くのはあれなんだけどさ」

「ん？」

言いよどみながらも、出来るだけさりげなくなるように気をつけながら皐は尋ねる。

「姉さん、死ぬ時って何考えてた？」

「コンビニで買ってきたアイス食べたい」

「.....」

あまりに即座に返ってきたため冗談なのか本気なのか測りかね、皐は黙ってしまう。

「と言うのは冗談なんだけど——本当に知りたい？」

「——！」

そう問われると、知りたいとすぐには返答できなかった。菖子の答えを聞いたからと言って今の自分に何が出来るわけでもない。それは皐にも分かっていた。分かっていたが、敢えて考えるのを避けていたことだった。

菖子は死ぬとき何を思ったのか。その問いは菖子が死んでからずっと皐の中にあった。菖子が死んでから一日が過ぎ、二日が過ぎ、葬式も終わって菖子がいない日々が日常になっていくにつれて、このことが皐の心を占める割合は大きくなっていった。

最後に見た元気な菖子の姿を思い出す。別に後味の悪い別れ方をしたというほどではない。ちょっと姉妹らしく反発しただけだ。菖子がどうしてもというのなら半田への旅に付いていったいいかな、と言う気持ちすらあった。たったこ

れだけ。たったこれだけの小さなことのはずなのに、どうしてあの時素直に一緒に行くと言わなかったんだろうという後悔が皐の胸に湧き上がる。こんなことが思い残したことであるはずはない。もっと違うことを考えて死んだはずだと理性では考えるのだが、頭の中では菖子が死ぬ前に交わした会話ばかりが繰り返される。

歴史に「もし」はないとはよく言うけれども、人の生にも「もし」はないのだ。もしあの時素直に一緒に行くといっていたら、菖子はコンビニに行くことはなく、事故死することもなかったかもしれない。——そんな「もし」は意味を持たない。

目の前に菖子が現れた時、再び逢えた喜びや、何故ここに居るのかという疑問よりも恐怖が先に立った。菖子の思い残しを作ったのは自分だ、そんな事実の目の前に突きつけられたくなかったが、そんな事実はないと否定されることでこの後悔から解放されたくもあった。

「ごめん、そんな顔させたかった訳じゃないんだ。でも、言えない。死んだ人の遺志を皐だけ知れるなんてルール違反だよ」

「.....」

どこの、何のルールだと言いたかった。それでも菖子の言いたいことはなんとなく判る気がした。生きている人は死んだ人の遺志を直接知ることはない。知らないまま、思い悩みながら、苦しみながら生きていくのだ。皐が菖子に尋ねた事はそんな悩み苦しみからの逃げでしかない。

「ほ、ほら、見て！」

黙り込んだ皐を励ますように明るい声を出し、菖子は皐の裾を引っ張る。顔を上げ菖子の指差す方を見た瞬間、皐は目を見開いた。

「.....」

目の前の光景に文字通りことばを失くす。道沿いに一面の赤色——彼岸花——があった。秋らしいさわやかな風に吹かれると花同士が触れあいさわさわと言う音を立てながら揺れる。そして、その揺れは徐々に全体に伝わっていく。そのさまは赤い布が波打つようでもあった。

「綺麗、だね」

「.....うん」

菖子の言葉に素直に頷く。写真で見るよりも一輪一輪力強く咲くその姿には着飾った言葉よりも率直な一言が一番合っている気がした。彼岸花の凛と咲き誇る姿が少し羨ましかった。生きているのなら、どんな悩みがあってもこんな凛とした生き方を——

「——最期にこの光景を見れてよかった」

「.....最期？」

思わぬ言葉に菖子の姿を改めて見ると灰かに彼岸花と同じ赤い色を全身に纏っている。

「ね、姉さん！なに、それ...」

「んー、もう時間かあ」

菖子は仕方ないね、と呟きながら困ったように笑っている。この笑みを見たのは今日何度目だろうか。

「時間って.....」

皐が呆然としている間にも、菖子を纏う光が強くなっていき、それと比例するように菖子の姿が背景に溶けてゆく。

「そうだ、彼岸花の花言葉、もう一つ教えてあげる」

「いま、そんなことっ.....！」

「『また会う日を楽しみに』」

先ほどの困ったような笑みではなく心から楽しみにしていることがわかるやさしい笑みを浮かべている菖子の姿は、纏う赤い光とあいまって美しく、皐は何も言えなかった。

「彼岸花のおかげでこうして再会できたなら、またこうして会えるかもしれないね」

菖子は、皐の顔に両手を添えた。皐の両の目から流れている涙は菖子の手がまるで存在しないかのように頬を伝う。

「まってよ、そんな、いきなりっ！」

「だから、またね」

そう言った瞬間、菖子を纏う光が一気に強くなり、皐は思わず目を瞑ってしまった。光が収まって目を開けると、菖子の姿はどこにもなく、ただ彼岸花が風に揺れているだけだった。

「——またね」

最後の最後まで、別れを告げるのではなく再会を約束するのが菖子らしい。皐は涙を拭い顔を上げる。その口元には

小さな笑みが浮かんでいた。

＊ ＊ ＊

結局、あの日あったことは、父母を含めて誰にも話していない。信じてもらえるはずがない、というのもあったが、誰かに否定されることで皐自身が菖子に会ったことを信じられなくなりそうで怖かった。

「よし、と」

皐は菖子の机の上に透明な細長い花瓶を置く。そこには一輪の彼岸花が活けられていた。

「こうするの、今日までか」

今日は四十九日の法事の日。遺された皐達のけじめの日でもある。あの旅の後、こうして近くの公園からきれいに咲いている彼岸花をもらってきて活けてきたが、それもこの日までと決めていた。

「———また、会えるよね？」

感慨に耽りながら机上の彼岸花を見つめていると、階下からこの一ヶ月半で少しだけ元気を取り戻した母の声がした。
。

「皐一、お茶用意するの手伝って！」

「はい！」

返事をし、階段を下りていく。

風もない部屋で彼岸花が微かに揺れた。

Trip Break 4

日本にいて最も身近に感じる神社といえば、やはりお稲荷さんだろう。日本中に 3 万以上あるらしく、多くの日本人が一度は訪れたことがあると思う。そのお稲荷さんの総本宮が「伏見稲荷大社」である。

JR の大阪駅から最寄り駅である伏見稲荷駅まで 1 時間足らず。交通の便が良く、昼間であれば駅からの道なりで観光地らしい京都も楽しめる、観光スポットの 1 つである。

しかし、僕はあえて真夜中、それも電車もなくなる 24 時頃の伏見稲荷大社を勧めたい。

昼間であれば多くの人通りがあり、太陽に照らされた自然をも楽しみつつ、荘厳な様に感動する場所であるが、真夜中となれば話は違う。

喧騒は消え、人はほとんどおらず、暗い中石畳の上を歩くことになる。かの有名な千本鳥居は、昼間であれば少々騒がしすぎる程なのに、夜になるとまさに異世界の入り口のようで、最初の一步を踏み出すのに少しばかり勇気が必要になる。道には明かりがあるのだが、それが真っ赤な鳥居を怪しく照らしており、なんとも言えない雰囲気を作っている。

伏見稲荷大社は全てを回るのに 2 時間程かかり、まるでハイキングのようなのだが、太陽が出ていれば汗をかきながら暑い暑いと歩くところも、真夜中だとじんわりと汗に濡れた身体を冷たい山の空気が撫で、夏であっても寒を感じる。

日本にて古来から祀られてきたお稲荷さんと、静寂の中で向かい合ってみたい方。少し普段の生活とは違う空気を味わってみたい方。是非とも夜中の伏見稲荷大社へ。

文・写真／岡田朋之





【編者例言】

- 一、本稿は、散在する日々器晶氏の著述を蒐集したものである。
- 一、配列の順序はおおむね時系列に沿っている。
- 一、蒐集の対象は紙媒体の日記（以下、手記とする）と、ブログ『リアル怪獣映画館』のエントリ（記事）である。また、それらからの複写・複製物を含む。
- 一、すべてが本人の著述である保証はないが、日々器晶という人物の特性上、真贋性の評価は行っていない。

I. 二〇XX年当時の状況について

【ブログエントリ『自己紹介』より】

おはよう、こんにちは、こんばんは。

私は日々器晶という人間だ。戦場カメラマンをやっている。こんなタイトルを付けておいてなんだが、このブログを訪ねてくれた皆に、いまさら私のことやこの戦争について講釈を垂れる必要もないだろう。

しかしながら、このブログが数十年後、数百年後に顧みられることがないとも限らない。そのわずかな可能性に賭けて、あえて書き記しておこうと思う。

怪獣が日本に現れ始めたのは、今から五年前のこと。

いわゆる「大進撃」と呼ばれる出来事だ。未来の歴史の教科書にも載っているのではなかろうか？ 怪獣が初めて出現した事件であり、そして未だほかに例を見ない、四十体以上の同時出現だった。

端的に言って、怪獣はそこまで強くない。たしかに全長百メートルを超えるようなデカブツもいるが、概して人類の持つ兵器で十分に対処できる。

だが「大進撃」の際は、なにぶん突然だったことと数の多さから、日本の対処は後手に回って——わかりやすい結果で言えば、人口が半分かくらいまで減った。

さらにその数週間後に起った怪獣の越境事件もあり、日本の怪獣災害はたちまち東アジア圏全体の問題となる。

まあ詳しいところは省くが、かくして日本は要塞化された居住区域「天蓋都市」を複数設けるとともに、米・露・中そしてASEAN軍の進駐を受け入れ、さらに自前の自衛隊と併せることで、怪獣に備える防衛体制を整えた。

つまり日本という国は、そのものが「怪獣の狩り場」となったわけだ。

なぜだかわからないが、怪獣は日本にしか現れない。他の地域へ向かうにしても、その途中で必ず日本列島を通る。よってそれ以外の国が受けた被害は、最初の混乱期を除けばほとんど皆無だ。日本で食い止めてしまえば、今後も被害は出ることはない。

いっぽう、理不尽にも一国だけ割を食わされた日本も考えた。「このまま損のしっぱなしでは終われない」、と。

そうして出来上がったのが、怪獣と各国軍の戦いをエンターテイメントにしてしまう、という方法だ。二十世紀後半に「怪獣映画」とジャンルが栄えたわけだが、あれのリアル版と言えわかりやすいだろうか。

本物の迫力と、本物のスケール感。

臨場感あふれる「狩り」の様子は、またたく間に世界の一大娯楽へと成長した。大手テレビ局やネットメディアがこぞって参入したのは勿論だが、私のようなフリーランスの人間もすぐさま戦場へはせ参じたというわけだ。

わかっていただけたでしょうか？

私は戦争をエンターテインメント化することを仕事にしている。

昔からの因習で「戦場カメラマン」などと呼ばれているが、間違っても報道写真家ではない。ジャーナリズムなど糞喰らえ。

私はただのエンターテイナーだ。

——と、ここまで書けば私のスタンスは理解してもらえるだろう。

何、ロバート・キャパ？ ああ尊敬しているとも。

彼の撮った写真は、最高にエンターテインメントだからね。

II. 飛行怪獣追撃戦

【ブログエントリ『富士山上空の空中戦』より】

今日はまっこと喜ばしいことに、少々厄介な事態に遭遇することができた。

狩りの標的は、東北地方の山岳部より出現したラ型9号（編集注記：怪獣はその特徴によって複数の`型、に分類したうえで、出現順にナンバリングされていた。ラ型は`ラドン型、の略称であり、翼竜や怪鳥など飛行するタイプが含まれる）。

ロシア軍の防衛担当区域から南進し、米軍管区との境界地帯である富士山上空まで飛来したというわけだ。ラ型を追撃してきたロシア軍と、スクランブル発進した米軍機が、一ヶ月ぶりの獲物を争う格好だ。

時刻は午後五時。夕陽に赤く照らしだされた富士山の上で、飛行機雲が見事に交錯していた。

結果は、ロシア軍のスマルノフ大尉が今年度2匹目の討伐。はるばる東北から追ってきた執念の撃墜だ。ひらりひらりと空を舞う翼竜のうしろに、大尉のSu-35S戦闘機が滑りこんだかと思えば——すかさず機関銃の連射でバラバラにしてしまった！

おまけのパフォーマンスで機首を大きく跳ね上げ、さながら戦闘機で逆立ちをするような飛びっぷりで、主翼のエンブレムマークを見せつけていく。そんな余裕を見せつけられては、横取りする気満々だった米軍機もすごすごと帰っていく他ないというものだ。

さて、大尉が駆るSu-35Sの原型機は、もともと`鶴、を意味する愛称を持っていた。それもなるほどと頷ける。長く伸びた機首はくちばしを彷彿とさせるし、両翼は驚くほどに大きい。そしてそれらを繋ぐ美しいフォルム——見る者はまさしく翼を広げた鶴を思うことだろう。ぜひ各種メディアに掲載される私の写真で、その雄姿を確認してほしい（私も写真で食っている身。残念ながらタダのブログで見せるわけにはいかないのだ！）。

III. 松島上陸阻止作戦

【ブログエントリ『ああ松島や』より】

このところロシア軍が絶好調だ。

今回の狩り場は旧宮城県・東松島の海岸線。上陸しようとするギ型（注：ギドラ型。複数の首をもつ怪獣を指す）12号を、ロシア軍と陸上自衛隊の機甲部隊が迎えうつ構図だ。

主役はなんと言っても、ロシアのT-90主力戦車。丸っこい砲塔がどことなく亀の子タワシを思わせるが、全長6メートルを超える主砲は亀の首にしては長すぎる。そんなアンバランスなナリだが、海岸沿いの荒野を縦横無尽に駆けぬけ、自慢の125mm主砲で砲弾を浴びせていく姿は、颯爽という言葉がよく似合った。

ギ型怪獣の四つの首を、ほぼ同時に、ひとつ残らずまとめて吹き飛ばした連携は、もはや芸術の域。もちろんその瞬間を収めた私の写真は、皆に同じ興奮を伝えうるものと自負している。

【手記より】

狩りが始まる前に抱いた印象は、ギ型怪獣が絶命したあとも消えなかった。

目の前には、四つある頭を残らずザクロのように弾けさせた怪獣の死骸が横たわっている。小山ほどもあるその巨体をもってしても、この広大な荒野の寂寥感を埋め合わせるのは不可能だ。

今回の戦場となった東松島の沿岸部は、`大進撃、よりもさらに以前、あの震災によって遮るもののない平野となった。ところどころに残されていた無人の廃屋さえ、今日の戦いで戦車と怪獣が残らず踏み潰し、平らに均してしまった。

後に残されるのは、怪獣の死骸とキャタピラの跡。

そう遠くない過去に、ここが人の住む街であったとは、とても信じられそうにない。

怪獣の出現を、地震や台風と同じ「自然災害」と捉える見方もある。

そのいっぽうで、

襲いくる怪獣と人類の戦いは、全世界に向けて華々しく報じられて世界的なエンターテインメント.....そして世界的ビジネスになっている。軍人たちは英雄として名を馳せ、プロスポーツ選手かアニメのヒーローのような扱いだ。その背後では兵器メーカーがせっせと新兵器を量産している。

有史以来、地震や台風がエンターテインメントとなったことはない。しかし、なぜだか怪獣はエンターテインメントになった。もちろん「戦い」や「狩り」という、形の上での「わかりやすさ」は大きいのだろう。

だが、やはり前者と後者にそれほど差があるのだろうか。後者は`いまのところ、制圧できているというだけの話ではないか。

そしてどうにも不安なことに、怪獣について未だ多くが謎のままである。連中はどこから現れるのか。なぜ日本にばかりやってくるのか。しょっぱなの`大進撃、を除いて、来襲が単体・散発的なのは何故か。

地震や台風は、仮にも原因が説明されている。だが怪獣にはそれすらない。いかんせん武力での対処療法が可能なために、人類は考えることを止めているのではないか。

怪獣はおそらく、天災だ。

人類は本当に、それを正しく認識しているのだろうか。我々は何かとても大切なことを見落としているのではないか。この松島の荒野を眺めていると、そんなことを思わずにいられない。

Ⅲ．九州沖南方海戦

【ブログエントリ『長崎の反戦運動』より】

南太平洋よりゴ型17号が九州を目指して北上中だという。

ちなみにゴ型というのはゴジラ型の略で、由来はもちろんあの怪獣映画なのだが、カテゴリ的には「特徴のない爬虫類系」という残念さだ。今回の17号もゴジラというより巨大なカメレオンらしい。あらかじめ申し添えておく。

なにはともあれ、泳ぎくるゴ型17号に対し、九州を守る中国の艦隊が出撃することになった。まこと不覚ながら今回出遅れてしまった私は、長崎港より出港する艦隊を泣く泣く見送るはめになってしまった。はるばる九州までやって来たのに、骨折り損のくたびれもうけである。

メディアに売れる写真も撮れず意気消沈だったが、幸いにもこのブログの賑やかしになりそうな面白いモノには行き会うことができた。

今となっては絶滅危惧の、反戦団体というヤツだ。

軍港を囲むフェンスの前に小さな人だかりができていた。手作りの横断幕とプラカードを手にした彼らは、人数にしたい三十人くらい。

戦争を食いものにする職業柄、彼らのような団体とは相容れない私だが、幸い顔は割れていなかったらしい。カメラを隠して近づいてみると、存外親しげに話を聞かせてくれた。

リーダーの宇予局摂氏（仮名）は、出港するフリゲート艦を背にして意気揚々と語る。
「怪獣だって生き物なんです。しかも同じ個体はひとつとして存在しない、すなわち絶滅危惧種ですぞ！ それを自分たちの都合で虐殺しようなんてけしからんです！ あまつさえ外国の軍隊に頼るなんて、まったくけしからん！ そもそも、武力を持つことがけしからん！ 怪獣は神の御使いとも言われているのに……（中略）……まったくけしからん！ けしからん！」

いろいろと主張が`混ぜるな危険、といった印象だが、このご時世、反対運動も大変なのだと実感させられる。
怪獣保護、外国軍の進駐反対、はてには怪獣を神格化する宗教系――。どれも`大進撃、のほとぼりが冷めて分担防衛の形が整った頃には、雨後のタケノコのごとく大量発生したものだ。しかし時が過ぎ、怪獣退治がエンターテインメントとして定着するにつれて、それらは自然消滅していった。

いま残っているのは、宇予氏の団体のような寄せ集めのごった煮集団ばかり。世論を動かすことなど夢のまた夢、一般大衆には存在すら認知されていないだろう。次々と出港していく勇壮で統率の行き届いた艦隊との対比が、どうにも哀愁を誘った。

だが考えてみてほしい。「怪獣とは何か」という、そもそもの問題を見失って――いや、あるいは意図的に目を逸らしているのは、我々も同じではないだろうか。むしろ彼らのように反対する立場の人間のほうが、持論を構築し展開しているぶん、向き合う姿勢に真剣さがあるとも言える。

宇予氏らの存在は、ある意味で我々に警鐘を鳴らしているのかもしれない。

【手記より】

はじめに断じておかなければならない。先日のブログ記事は唾棄すべきものだ。あのような三流ジャーナリズムかぶれは日々器晶にあるまじきものと、改めて心に刻まなければならないだろう。

そもそも、この日記はあんなことの為に存在しているのではない。

私が何かを思い、意見を持つことは勝手であるし、それを日記に書きつけることもまた勝手である。しかしながら、それを安直に世間へと広め、他者に押し付けてしまうことは問題だろう。

日々器晶は、「論じてはならない」のだ。ひとりのエンターテイナーとして、何かに意見するより前に、誰かを楽しませるべきだろう。

もっとも――言うまでもないことではあるが――一時として意見することが娯楽に繋がること、また逆に娯楽それ自体が主張を帯びることも忘れてはならない。そのうえで、日々器晶として`語るべきこと、を見定めていく必要があるだろう。

さて、自省はこれくらいにして長崎の感想といこう。
宇予局摂氏（仮名）の話を聞きながら、その実、私はまったく別の空想にとり憑かれていた。軍艦の砲がこちらを向いて、そこにいる人々を皆殺しにするという悲惨な妄想だ。

宇予氏ら三十人の身を守るものは、つぎはぎだらけの主張と「一般人」という身分だけ。つまりはまったくの無防備だ。フリゲート艦の口径10cmにも満たない砲が――いや、もっと貧弱な機関銃でも構わない。なにしろ軍艦の備える武装が、たったひとつでもふり向けられ発射されたなら、彼らは成すすべなく殺されてしまうだろう。一瞬のうちにひき肉だ。

もちろん、そんなことをしても誰の得にもならないし、したがってそんなことが起こるはずもない。
けれど私は、舷側に備えられた対空機銃の銃口がこちらを睨みつける光景を、どうしても頭から追い出すことができなかった。そうやって生み出される血の池地獄を、あるいは私は望んでいたのかもしれない。

いや、渴望していたのだろう。

ようやく気づいた。私は、人が死ぬところを見たことがない。

もちろん燃え墜ちる航空機や踏み潰される戦車は何度も目撃しているし、ファインダーに収めてもいる。しかし、目の前で生身の人間が八つ裂きにされ、轢き潰されることはただの一度としてなかった。

人の死に目にすら立ち会えず、何が「戦場カメラマン」か。まったく虚しい称号だ。画竜点睛を欠いている。

これは、私にとって致命的な弱みだろう。

耐えがたき恥辱とさえ感じられる。

あの軍港よりあと、どうしてもそんな疼きが頭から離れない。

IV. 某廃村における小型怪獣掃討戦

【プログエントリ『とある廃村にて』より】

十名の兵隊といっしょに押し込められた車内は、お世辞にも快適とは言い難かった。

先日、私は陸上自衛隊の東部方面軍第一師団に属する第三中隊第二小隊の面々とともに、旧群馬県内の某所に向かっていった。なんでも無人の廃村に小型の怪獣が棲みついたらしく、その討伐に同行させてもらえる運びとなったのだ。

「まあ害獣駆除ってところですよ」

小隊をさらに三分した〆班、のひとつを率いる、日向英貴三尉は言う。

今回の標的は、人々が住まう天蓋都市を脅かすレベルには程遠く、無人の廃村がいくら荒らされたところで痛くも痒くもないのだが、それでも相手は怪獣だ。何が原因で急成長や突然変異を起こすかわからない。

「世間じゃすっかりエンターテイメント扱いですけど、だからこそ、こうやって我々がしっかりコントロールしないといけません」

ようするに、これは間引きだ。対怪獣戦争を安全で娯楽性に富んだ――そして何よりも採算の合うエンターテイメントとするために、どうしても必要な裏方仕事。

「そう言われてしまうと地味な役回りですけど、やりがいがありますよ。縁の下の力持ちとか、裏の立役者ってかんじで」

まだ若い日向班長はそう言ってはにかむ。

「それに最近は、あなたのように我々の任務を取り上げてくれるメディアも増えましたしね」

彼の言う通りかもしれない。〆本番、をひき立てるために裏方仕事为抓手と整えられることは、エンターテイメントとして成熟した証だろう。さらに言えば、その裏方にまで取材の目が向くということも、また。

「――さて、着いたようですね。一応あなたには自由行動が許されていますが、くれぐれも無茶は控えて下さい。我々についてこようと思えば相当ハードですから」

ニヤリと笑った少尉に対して、その時は「若造が何を偉そうに」と思ったものだ。こちとらカメラとペンと生身だけで幾つもの戦場を渡ってきたのだ。ハイテク装備に守られた〆裏方、ごときに、後れをとるわけがないだろう、と。

いやはや、思い上がりも甚だしかった。

狭苦しい兵員輸送車を飛び出した彼らは、他の車に分乗していた仲間たちと合流したかと思えば、すぐさま小班に分かれて村の中へと散っていく。その流麗さに見惚れていた私が我に返って、慌ててあとを追った時には、自然に呑みこまれた村に銃声が響き始めていた。

息を切らして駆けつけた頃には、メインイベントはもう終わっていた。

はるばる三時間、車に揺られてやってきたというのに、肝心の駆除に掛ったのはほんの数分。こんなに余裕な任務ならば、私が来るまで待ってくれてもよかったものを、と文句をたれる私に対して、日向三尉は引き締めていた表情を崩し苦笑した。

「ご期待にそえず申し訳ありません。我々裏方は、どうしても効率と実利重視なもので」

いささか華やかさに欠ける取材であった。

しかしながら、丸太のような大蛇の死骸と突撃銃を下げた兵士たち、というのも、なかなかどうして「それらしい」画になったので良しとしよう。

盛大で絢爛なりアル怪獣映画の舞台裏には、彼らのような名もなき立役者たちがいることを忘れないでいよう。そんな風に、綺麗に締めくくっておくでしょう。

【※編集注記】

一般に公開されていない当時の自衛隊内部資料によれば、くだんの廃村に派遣された第三中隊第二小隊の全二十七名は、ただ一人として帰還せず、その後まもなく搜索も打ち切られている。

同行していた日々器氏についても、消息不明とされたまま記録は途絶えている。

【手記より】

さて、まことに遺憾ながら、私は殺されてしまった。

先日のブログにも記されている廃村へ赴き、私は還らぬ人となったのだ。棲みついていた怪獣にやられたのか、それとも誰かしら人間の陰謀だったのか、それはわからない。とにかくにも私は死んでしまった。

したがって私に、あのブログ記事を書くことはできない。あれを書いたのは、私になりすました別の誰か、ということになる。

この件について、私に犯人を糾弾するつもりは微塵もない。日々器晶という人間の性格——いや、人間性、に照らしてみれば、むしろこれは願ってもない事態と言える。

ニセモノ君。どういうつもりかは知らないが、私は君を歓迎しよう。

君が私としてふるまう限り、君が「私である権利」を奪われることは決してない。そこに悪意や立場の違いがあろうとも、そんなことがなんだと言うんだ。すべて「私」の行いである。他人から見て私が私である限り、私は私を否定しない。

考えてみたまえ。憎むべき戦争さえエンターテインメントとなったのだ。

人間が、今まで通りである必要がどこにある。

「私」が単一の個である必要もなければ、集団が複数人である必要もない。

アイデンティティなど糞喰らえ。私は元来、支離滅裂な人間だし、自分に同一性など感じていない。多重人格と言うのがわかりやすいなら、そう理解してくれても構わないだろう。

たったひとつの「本当の自分」などと、ツマラナイものに拘るは愚の骨頂！

それどころか、私など沢山いてくれて大いに結構。大量生産と普及浸透こそ、エンターテインメントの必須条件なのだから。

怪獣なんてふざけた連中が出てくるご時世だ。人生、楽しまなければ損というもの。これからは、アイ・アム・エンターテインメントとでも名乗らせてもらおう。

V. 旧神戸市少女感応事件

【ブログの仮保存データに残されていた無題のドキュメントより】

怪獣に対する感受性が強い人間、というものがいることをご存じだろうか？ まだまだ一般的な認知度は低いものの、我々の界限ではそれなりに有名な話だ。

怪獣の出現を予知したり、怪獣の意志やら声、やらを聴くことができたりと、真正の超能力からマユツバものまで玉石混交の様相だが、数だけはそれなりのものだ。

そして今回、私が取材したM・Aさんは、そんな中でもかなり特異なケースと言えるだろう。

M・Aさんは関西地区の天蓋都市に住む女子中学生。彼女のプライバシーもあるため、ここでは長い黒髪と猫のような

目がチャームリングだったとだけ書いておく。尚それから、いつまでもイニシャルでは可憐さが伝わるまいから、以降、彼女のことはあすみ（仮名）と呼ぶことにしよう。

ごく普通の女子中学生（自称）だったあすみは、ある日突然、一匹の怪獣と精神的に「繋がった」という。彼女が愛着をこめて「タイカヨウ」と呼ぶその怪獣とリンクすることで、あすみには「運命」とやらが視えるようになったらしい。

――はっきり言って、玉か石かなら後者だろう。私もはじめはそう思った。

だが実際に彼女は、怪獣ガ型23号すなわちタイカヨウの日本来襲を誰よりも早く察知し、各所にタレこんだ。そのタレコミ先のひとつに、光栄にも私が入っていたわけだ。そして数ある候補のなかであすみの話を真に受けたのも、幸いにして私ひとりだったらしい。

軍と国はあすみの感知から遅れることおよそ五日、自前の警戒網によってタイカヨウの接近を探知した。もちろんこれまで幾多の怪獣接近を事前に知らせ続けてきた優秀なシステムだ。時すでに遅し、などということはまるでなく、十二分な迎撃態勢が整えられた。

つまり、あすみが「早すぎた」だけだ。

何はともあれ今回は先見の明に恵まれ、いちはやく彼女とコンタクトできた私だったが、あすみという少女については認識が甘かった。

「家出するので、連れて行って下さい」

そこそこ名の知れたお嬢様学校の制服に身を包んだ彼女は、開口一番、そう言った。

たしかに、怪獣と繋がって運命が視えるようになった、などと言う人間は、そもそもマトモでないかもしれない。だが彼女のメールには「そんな異常な能力に怯え、気味悪がられることを覚悟しながらも、勇気を振り絞って通報した」という、ある意味で「自然な」印象があった。間違っても、自分から「怪獣に会わせろ」と言い出す人間の文章とは思えなかった。

それについてあすみに尋ねてみたところ、

「あれは、そのほうがあなた方を釣りやすいと思ったからです」

あっさりそう切り捨てられた。

彼女の言う通り、「恐ろしい怪獣の存在に怯えるか弱い少女」というのは、今も昔もさまになる構図だ。結果としてまんまと釣り上げられてしまった私が、いまさらになって彼女から逃げおおせることなどできるはずもなかった。

それでも、少女を戦場に連れて行く引け目から「いざという時も守ってやれないぞ」と言い訳をすると、またしてもあすみは、表情すら動かさずに即答した。

「構いません。そこで死ぬなら、それも私の運命ということです」

ひいき目に見ても、彼女はいろいろと振り切れていた。

そういうわけで私とあすみは、タイカヨウ上陸の当日、かつて神戸港と呼ばれていた港湾地区を訪れていた。

「タイカヨウは、私を目指してやってきます」

あすみの言葉通り、私たちの移動に従ってタイカヨウの進路はわずかに変化。上陸阻止に展開していた部隊まで直前の移動を強いられたことは余談である。

現場に到着した私たちは、港に張り巡らされた空中回廊の上に陣取った。海からはわずかに二十メートル足らず。波が高いと水飛沫さえかかる距離だ。この港が放棄されて以降は手入れもされていない、老朽化いちじるしい空中回廊は足場として不安だったが、おかげですぐ下には行儀よく整列した榴弾砲とミサイル発射基がよく見えた。

あすみの同行は、私の助手として無理矢理ねじこんだものの、オーバーコートの中が制服のままの彼女では、助手だという言い訳も苦しくなってくる。

そんな心労をあすみが押し量ってくれるはずもなく、ただ彼女はおぼろげな水平線を見すえて呟くのだった。

「――来た」

目を凝らしても見つけることはできず、最大望遠のカメラにも、やはり穏やかな海面しか映らない。それでも、彼女には視えているらしい。

「会いたかった。さあ、いらっしやい、タイカヨウ！」

両手を大きく広げ、あすみは遥か彼方の怪獣を抱擁するかのよう。

同時、海岸の砲列が一斉に火を噴いた。

カメラはどう頑張っても光の届く範囲しか写せないが、砲弾は放物線軌道を描いて水平線の向こう側にまで達するのだ。卑怯だと言わざるを得ない。そしてあすみの感応は、その砲弾のさらに先を行っていたことになる。

砲撃の反動が、私たちの立つ空中回廊を揺るがせた。さきほども述べたとおり不安定な場所だし、すぐ背後には真っ赤なポートタワーが数年前に折れて崩れたままの姿を曝している。おまけに衝撃波のような砲声が、絶えず耳を劈いていた。あらゆる思考を頭の中からはじき出そうとするかのような音。

私ですら慄くその場所にあって、あすみは笑っていた。どのみち軍隊の上げる花火しか撮れない写真を諦め、私は彼女に視線を移した。

私にとって彼女は、いわば未知だ。

爆音が止んだ隙に、私はあすみに「運命」のことを尋ねる。

「——そうですね。タイカヨウのおかげで、私は運命を視ることができます。その気になれば、今日の夕飯だって当てられますよ？」

彼女なりのユーモアだったのだろうが、残念ながら笑えない。なにせ耳がばかになっているせいで、すぐ近くにいながら互いに叫びあっている状況なのだ。夕飯のことなど滑稽でしかない。

「ああ、それとも……。あなたがいま考えてらっしゃることを当てましょうか？」

聞き取りにくいはずなのに、トーンの落ちたあすみの声は嫌にはっきりと耳に届いた。私は無言のまま、頷きをもって答えに代える。

「私がどうして、運命を授けてくれるタイカヨウを助けようとししないのか、ですよね？ 私の、タイカヨウに対する態度はちぐはぐで、理解に苦しむ、とおっしゃりたいのでしょうか……？」

凶星だった。

あすみは恍惚とした表情で怪獣を呼びつけながらも、いっぽうで、その怪獣に容赦なく砲火が浴びせられる様子を、満足げに笑って見下ろしているのだ。いやそれどころか、彼女は愛しのタイカヨウの接近に感づいた時点で、いちはやくそれを軍にも通報しているのだ。タイカヨウを殺してくれと言わんばかりに。

そのアンビバレンツさが、腑に落ちなかった。

「——簡単なことです。ここまでたどり着くことすらできないなら、私の運命はしょせん、その程度のものだということ」

思わず、聞いたままを納得してしまう。

だがそれでも疑問点は残っている。私は訊かずにいられなかった。

「君が、ほんとうに自分の運命を知っているなら……たどり着けるかどうか、`視る、ことができるんじゃないのか？」

再開される砲撃の余波に長い黒髪を弄ばせながら、あすみはさらりとはぐらかす。

「さあ、どうでしょうね？」

本当に、どちらともとれる声音。私はすっかり、煙に巻かれている。

やや演出過剰に彼女は目を細めてみせた。

「私の運命はタイカヨウが教えてくれます。けれど、じゃあそのタイカヨウの運命は……『私の運命』の運命は、いったい誰が教えてくれるんでしょうね？」

砲撃は、やまない。

それは怪獣がまだ生きており、こちらを目指し続けているということ。それでも「ここを離れよう」とは言い出せなかった。彼女が言わせてくれなかった。

正直に認めよう。私は圧倒されていたのだ。

砲弾飛び交う戦場にて、自らの運命さえも手玉にとる目の前の少女の生き様に、圧倒されて声も出なかった。彼女のような人間を、闊達と言うのだろうか。

私にとって、彼女は疑いようのない未知だった。

【手記より】

人生は、しばしば旅にたとえられる。

人は自らの一生のなかで未知のものと出会い、それを理解するなり遠ざけるなり、なんらかのリアクションを起こしながら日々を過ごしていく。その営みこそ「生きる」と言うのだと、私は考えている。見知らぬ非日常の土地に赴かんとする旅にも、その本質は通じるものがあるのではないだろうか。

そしてそれは、あらかじめすべてが決められた『運命』に従って生きるとしても、基本的には変わらない。パッケージ化されたツアー旅行だろうと、旅は旅だ。むしろ先行者の経験に基づいてアレンジされ、旨みを濃縮された「未知との出会い」は、未知に感動するという目的からすれば、実に合理的だとさえ言える。『運命』にアレンジメントされた人生も、決して悪いものではないだろう。なるほど、やはり人生が旅とはいい得て妙だ。

しかし私は満足できない。

ただ自由に則り、あてどない自主性をもって生きること。

『運命』に束縛されて、飾り立てられた順路を生きること。

その、どちらにも、満足できない。

自らの運命に触れながらも、それをもてあそんでみせた彼女は、私にとってのひとつの手本であり、また試金石なのだろう。

戦争はエンターテイメントへと進化した。

人間も、やがて個というくくりを棄てるだろう。

ならば人生は、どうだ。

これからも旅であり続けるのか。旅であることに甘んじるのか。

旅であることを棄ててこそ、私の目指す生にたどり着ける——どうにも、そんな気がしてならない。

【※編集注記】

日々器氏の手記は、ほぼ同一内容のものが合計3冊見つかっている。

これまでの引用はすべての手記に共通しているが、この部分は3つのうち1冊にだけ記述されており、他の2冊には存在していないものである。

【解説に代えて】

日々器晶という人物については、諸説ある。

複数人の共同ペンネーム、ないしは人名を装った集団の名称である、と考えるのが主流見解であるが、それすら彼のブラフである可能性は否めない。

やはり彼の正体は謎のままだ。

誤解なきように付記しておくが、同一内容の3冊が見つかった彼の手記は、筆跡こそ違えど、どれもすべて手書きによるものだ。もっとも、だからといってそのことは、記されている内容が複数人のあいだで「共有」されていなかった、と示す証拠にはなりえない。ひとつだけ確かであるのは、あえて「手書きに変換する」という、一見無駄な手間がかけられているということだけである。

彼の意図をすべて理解することは困難だろう。

今回蒐集した記述のすべてが、真実であるとも限らない。

そして何よりも――怪獣という未知を正しく認識できなかったばかりに、我々人類が地球放棄を強いられた今となつては、人類と怪獣が接触した直後の様子・世相を知るうえで、日々器氏の遺した記述は大変価値のあるものとなつてしまった。

もはや我々は、彼の著述を単なるエンターテイメントとして読むことはできない。しかし、そのことによって日々器晶という存在の魅力と、彼の持つユニークなセンスが曇ることは決してありえないのだ。

史料批判的な観点の重要性も承知しているが、本稿の構成にあたっては、あえて「日々器晶が望んだであろう形」に近づけようと心がけた。日々器氏へのせめてもの追弔となっていれば幸いである。

かろうじてテキスト部分の復元は叶った。

しかし添付されていた多数の画像データは、

損傷がはげしく復元困難だ。

当時の情報保存技術の未熟さを恨むほかないだろう。

「捨てたい旅行」

<http://p.booklog.jp/book/78005>

著者：Browsing

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kobekikaku13/profile>

発行日：2013年11月4日

編集責任者：黒田 直子

表紙制作：谷元 郁玲

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78005>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78005>

※本誌の複写・複製・無断転載を禁じます。

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ